

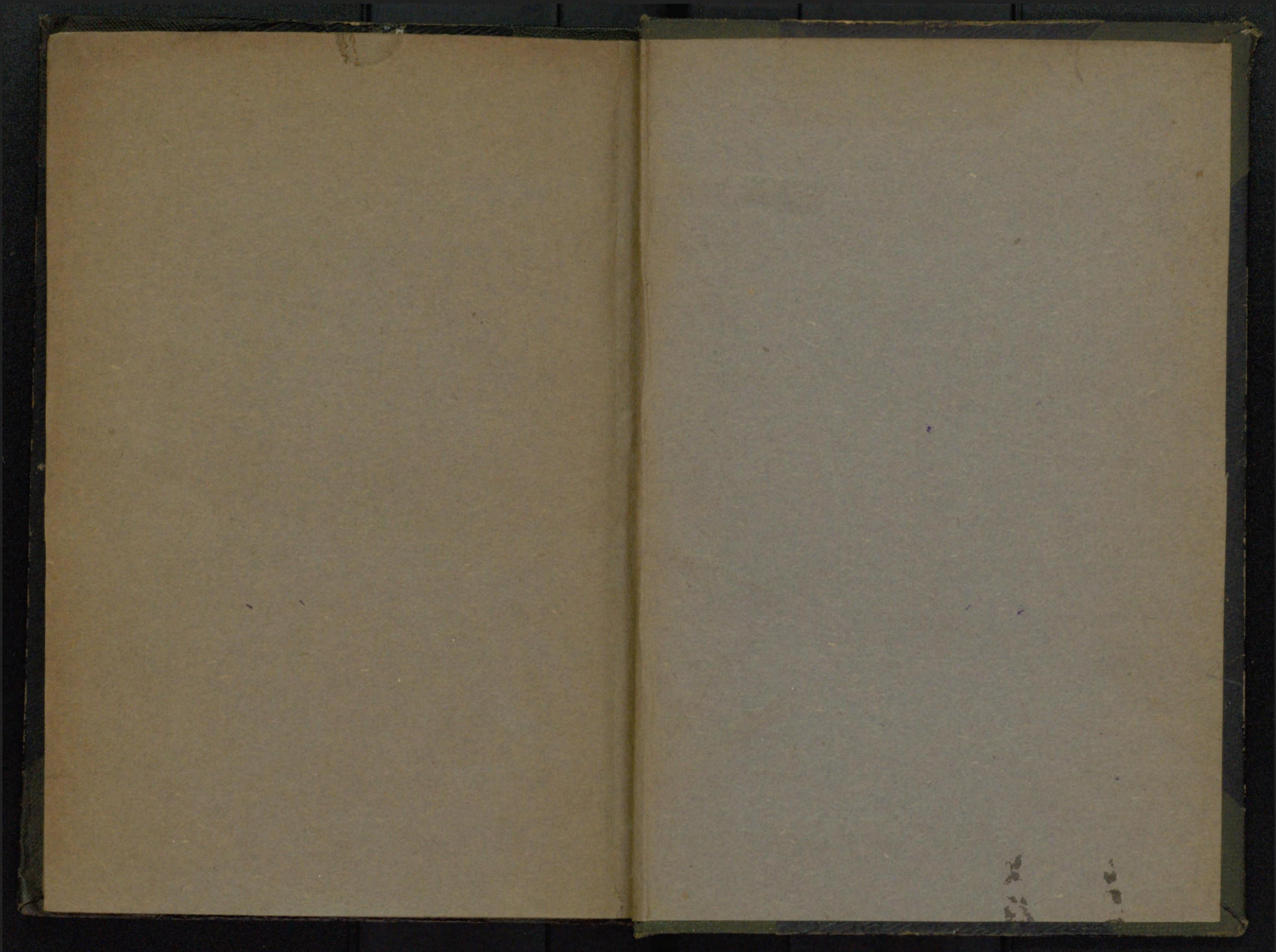
550-156



1200501508192

550
56





船 濶

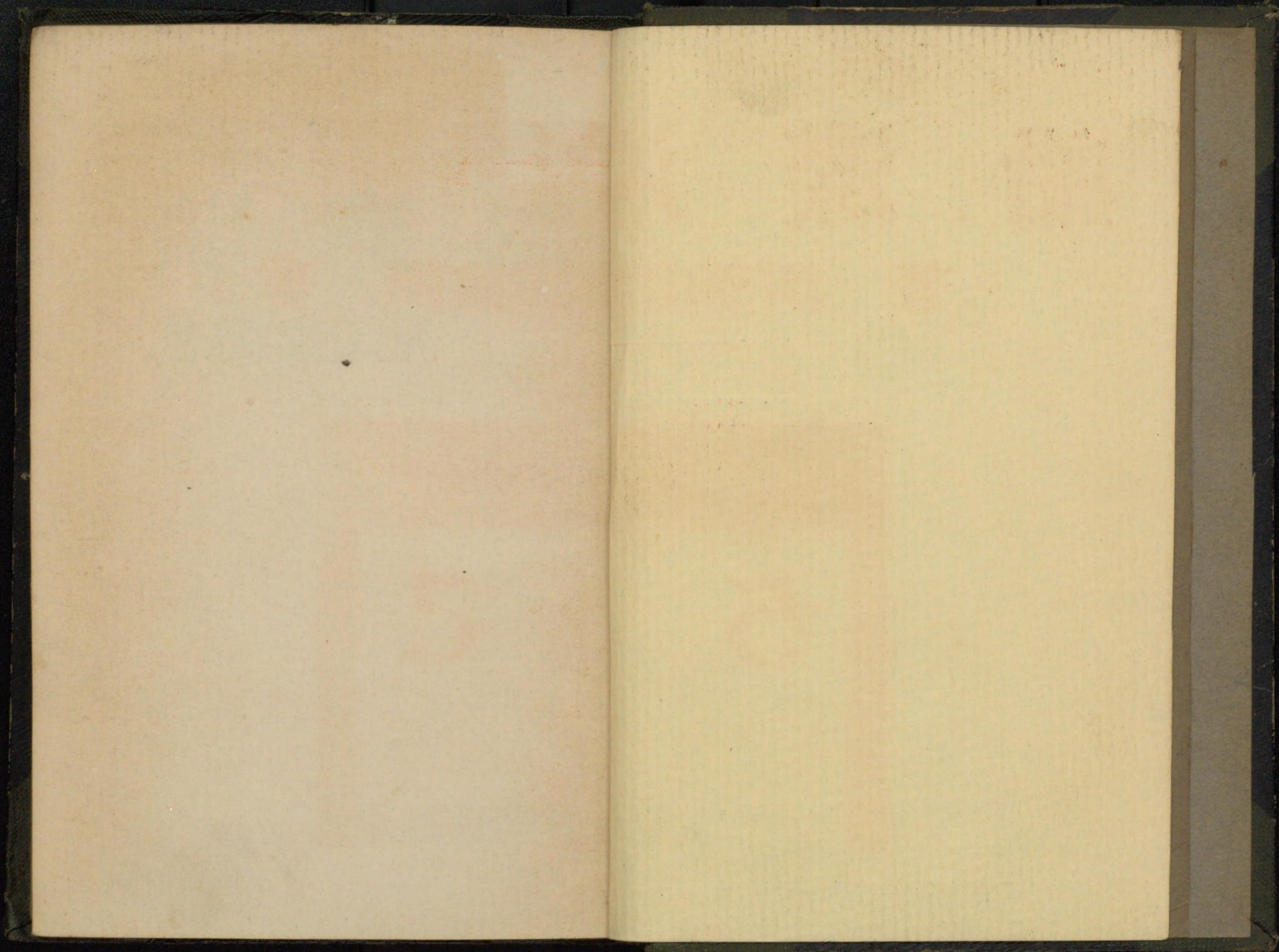
著 樹嘉山葉

550
156
及

書叢人新增

5

版堂陽春



浚 潔 船

葉山嘉樹著

文壇
新人
叢書

5



春陽堂版

550-156

目次

マドロスと鼠	印度の靴	プロレタリアの乳	刺された男	校正係	散歩	繡	田舎者が都會を見る	浚渫船	乳色の霧
.....
一四一	一一七	八七	八三	六五	六一	五三	四七	三一	一





乳色
の
霽

四十年來の暑さだ、と、中央氣象臺では發表した。四十年に一度の暑さの中を政界の巨星連が右往左往した。

スペインや、イタリーでは、ナポレオンの方を向いて、政界が退進した。

赤石山の、てつぺんへ、寢臺へ寢たまゝ持ち上げられた、胃袋の形をしたフェットがあつた。

時代は賑かであつた。新聞は眩しいほど、それ等の事を竝べたてた。

それは、富士山の頂上を、ケン飛んで行く雲の行き來であつた。

籠の方、巷や、農村では、四十年來の暑さの中に、人々は死んだり、殺したり、殺されたりした。

空氣はムンムンして、人々は、天ぶらの油煙を吸ひ込んでゐた。

一方には、一方の事は、全て無關係であつた。勝手に雲が飛び、勝手に油蟲どもが、這ひ廻つてゐるやうであつた。

2

人々は、眼を上げて、世界の出來事を見ると、地獄と極樂との繪を重ねて見るや

3

うな、混沌さを覺えた。が、眼を、自分の生活に向けると、何しろ暑くて、生活が苦しくて、やり切れなかつた。

その、四十年目の暑さに、地球がうだつて、鮎共が總て目を白くして浮び上つたと思ふことは、それは間違ひであつた。どこにでも避暑地と云ふものがあつた。日本には輕井澤があり、印度にはダージリンがあり、アメリカには、ロツキーがあつた。

「人間どもは、何だつて、暑い暑いとぬかしながら、暑い處にコピリついてゐるんだ。みんな足をとられてやがる。女房子に足をとられたり、ガツガツした胃袋に足をとられたり、さう云ふ、俺だつて、ざまあねえや、今まで足をとられてゐるたちやねえか。俺のは、鎖がひつからまつて！、動きがとれなかつたんだ。そこへ持つて來て、手を縛つて、梁へ吊しやがつたな。おまけに竹刀でバシバンと、すこたんを遠慮なしに打ん殴りやがつたつけ。あゝなると意氣地のねえもんだて、息がつけねえんだからな。フー、だが、全く暑いよ。」

彼は、待合室から、驛前の廣場を眺めた。

陽光がやけに鋭く、砂利を焙つた。その上を自動車や、電車や、人間などが、焙
簾の上の黒豆のやうに、バチバチと轉け廻つた。

「堪らねえなあ。」

彼は、窓から外を見續けてゐた。

「キヨロキヨロしちやいけない。後ろ頭だけなら、誰だつて怪しみはしないさ。キ
ヨロキヨロしてはいけない。眼が打つ突ると、直ぐに次へ眼を移
す。いけない、ひとりでキヨロキヨロするやうになる。五六人は、旦那衆がゐる
からな。ヘン。俺には分つてるんだよ。お前さんたちがどんなに田舎者見てえな恰
好をしてたつて、番頭に化けてたつて、腰辨に化けて居たつて、第一、おめえさん
なんぞ、上はアルバカだが、ズボンがいけないよ。晒しでもねえ、木綿の官品のズ
ボンぢやねえか。第一、今時、腰辨だつて、黒の深ゴムを履きやしねえよ。そりや
刑務所出來の靴さ。それから、お前さんは、番頭さんにや見えねえよ。金張りの

5

素通しの眼鏡なんか、留置場でエンコの連中をおどかすだけの向だよ。今時、番頭
さんだつて、どうして、皆度のある眼鏡で、ロイド縁だよ。おいらあ、一月娑婆に
居りあ、お前さんなんか、十年暮してるよりか、もつと、世間に通じちまふんだ
からね。何てつたつて、化けるのは俺の方が本職だよ。尻尾なんかブラ下げて歩き
やしねえからな。駄目だよ。そんなに俺の後ろ頭ばかり見てたつて。ホラ、二人で
何か相談してる。ヘッ、そんなに鼻ばかりピクピクさせる事はないよ。いけない。
こんなことを考へる時や碌な事あねえんだ。サテ。」

「下り、下の關行うゝまき。下り、下の關行うゝまき。」

驛手が朗かな聲で、三等待合室を鳴り渡らせた。待合室はざわめき初めた。

ニヨキニヨキと人々は立ち上つた。

乳色の霧

彼は瞬間、ベンチの凭れ越しに振りかへつた。誰も、彼を覗つてはゐなかつた。
それと思はれるのが二人、入口の處でゾロゾロ改札口の方へ動いて行く、群集を眼
で拾つてゐた。

彼は、立ち上つて、三つばかり先のベンチへ行つて、横目で、一渡り待合室を見廻した。幸、眼は光つてゐなかつた。

「もつとも、俺の顔を知つてる者はゐないんだからな。それに、俺だけが怪しく見えもしないんだからね。何しろ奴等にや、さいつもこいつも泥坊に見えるんだからね。」

彼は、ベンチへ横になつた。そして自分の寝てゐるベンチと並んでゐる、外のベンチを調べて見た。頭を搔くやうな恰好をした。さ、彼はもう帽子を被つてゐた。麥藁帽であつた。彼の手が、ブルツと顔を撫でると、口髭が生えた。さて、彼は、夏羽織に手を通しながら、入口の處で押し合つてゐる、人混みの中へ紛れ込んだ。

旦那の眼四つは、彼を見たけれど、それは別な人間を見た。彼ではなかつた。

「顔ばかり見てやがらあ。足や手を忘れちや駄目だよ。手にはバスケット足には下駄とな。チャンと此通り前と同じなんだよ。いや、御無禮。」

列車は、食堂車の中に挟んで、二等と三等に振り分けられてゐた。

6

7

彼は食堂車の次の三等車に入つた。都合の良い事には、三等車はやけに混雑してゐた。それは、網棚にでも上りたいほど、乗り込んでゐた。

その時はもう、彼の顔は無髭になつてゐた。

彼は、座席へバスケットを置くと、そのまま食堂車に入つた。

ビールを飲みながら、懐から新聞紙を出して読み初めた。新聞紙は、五六種あつた。彼は、その五つ六つの新聞から一つの記事を拾ひ出した。

「フン、棍棒強盗としてあるな。どれにも棍棒としてある。だが、汽車にまで棒つ切れを持ち込みやしないぜ。附近の山林に潜んだ形跡がある、か。ヘツヘツ、消防組、青年團、警官隊總出には、兎共は迷惑をしたこつたらうな。犯人は未だ縛につかない、か。若し捕つてりや偽物だよ。偽物でも何でも捕へようと思つて慌てゝるこつたらう。可哀相に、何も知らねえ奴が、棍棒を飲み込みでもしたやうに、叩き出されかけてゐるこつたらう。蛙を呑んだ蛇見たいにな。」

彼は、拷問の事に考へ及んだ時、頭の中が急に火熱るのを覺えた。

そのために、彼が土龍のやうに陽の光を避けて生きなければならなくなつた、最初の拷問！ その時には、彼は食つてゐない泥を、無理やりに吐き出さゝれた。彼の吐いたものは泥の代りに血ににじんだ臟腑であつた。

汚ない姿をして、公園に寝てゐた、(それより外にどうする事が出来たのだ!) ために、半年の間、ビツクリ箱の中に放り込まれた。出るさすぐ跟け廻され、浮浪罪で留置された。それが彼の生活の基調に習慣づけられた。

(どうせ、さうなる運命なら、それに相當した事をしなけりや損だ！ 俺も打ん殴つてやれ!)

さうなるためには、留置場や、監房は立派な教材に満ちてゐた。間違つて捕つても、彼の入る處は、云はゞ彼の家であつた。そこには多くの知り合ひがゐた。白日の下には、彼を知るものは悉くが、敵であつた。が、歸つて行けば、「ふん、そいつはまづかつた」と云つて呉れる(友)がゐた。

だんく(仕事)は大きく、大膽になつて行つた。

汽車は滑かに、速に亡つた。氣持よく食堂車は揺れ、快く酔は廻つた。

山があり、林があり、海は黄金色に波打つてゐた。到る處に(生活)があつた。その生活も彼にとつては縁のないものであつた。

彼の反抗は、未だ組織づけられてゐなかつた。彼の眼は牢獄の壁で近視になつてゐた。彼が、そのまゝ、天國のやうに眺める、山や海の上の生活にも、絶えざる闘争があり、絶えざる拷問があつたが、彼はそれを見ることが出来なかつた。

彼は彼一流の方法で、やつゝけるだけであつた。

夜の二時頃であつた。寝苦しい夏の夜も、森と川の面から撫でるやうに吹いて來る、軽い風で涼しくなつた。

本田家は、それが大正年間の邸宅であらうとは思はれないほごな、豪壯な建物とそれを繞る大庭園と、塀とで隠して靜に眠つてゐるやうに見えた。

邸宅の後ろは常磐木の密林へ塀一つで、庭の續きになつてゐた。前は、秋になる

と、大倉庫五棟に入り切れないほどの、小作米になる青田に向つてゐた。
 邸後の森からは、小川が一度邸内の泉水を潜つて、前の田へと瀧がれてゐた。
 消防組の赤い半纏を着た人たちや、青年會の連中が邸内のあちこちに眠さうな手で蚊を叩いてゐた。

本田家の當主は、家族の者ご主治醫とに守られて、陶製のものゝやうに、何も考へることも感じることも出来なくなつた頭を、氷枕と氷嚢との間に挟んでゐた。
 家族の人たち、當主の妻と、その子供である、二人の息子と三人の娘とは、何かを待つやうな氣持を、どうしても追つ拂ふことが出来なかつた。

當主は、寝てゐる處を、いきなり丸太ん棒、それも檜の木の、潛り門用の門でドサツとやられたので、遺言を書かうにも書くまいにも、眼の覺める暇がなかつたのであつた。

で、家族のものは、泣きながら食卓の前に坐らされてゐる、腹の空いた子供のやうな氣持を、抱かない譯には行かなかつた。

陰氣であつた。が、何だか險惡であつた。線香をいぶすのにも、お經を読むのにも早過ぎた。第一、室が廣すぎた。餘り片附きすぎてとりつき端がなかつた。退屈凌ぎに飲食ひすることは、前祝ひのやうで都合が悪かつた。

不思議な事には、子供たちは誰一人、眼を泣きはらしてゐなかつた。

本田富次郎の頭腦が、兎に角物を言ふ事の出来た間中は、彼は此地方切つての辣腕家であつた。

他の地主たちも、彼に倣つて立入禁止を斷行した。そして、累卵の危きにある(地主の權利)を辛うじて護る事が出来た。小作人どもは、ワイワイ云つてゐるだけで、何とも手の下しやうがなかつた。大抵目ほしい、小作人組合の主だつた、(ならず者ども)は、残らず町の刑務所へ抛り込まれてしまつた。

『これで、當分は枕を高くして寝られる』と、地主たちが安心しかけた處であつた枕を高くした本田富次郎氏は、檜の木の門でいきなり腦天をガンとやられた。青年團や、消防組が、山を遠巻きにして、犯人を狩り出してゐた。が、青年團や

消防組員は、殆んど小作人許りであつた！

勿論、當局が小作人組合に眼を光らさぬ筈がない。けれども、監獄に抛り込んである首謀者共が、深夜そうつと抜け出して来て、ブン殴つておいて、またこつそり監房へ歸つて、狸寝入りをしてゐる、と云ふ考は穿ちすぎてゐた。けれども、前々からさう云ふ計畫が立てられてあつたらう、とは考へられない事でもなかつた。

従つて、收監されてゐた首魁共は、裁判所へ引つ張り出された。その結果は、彼等は、「誰か痛快におつ初めたものだな！」と云ふ事を知つた。彼等は志氣を振り起した。

残つてゐた連中も、虱つぶしに引つ張られた。本田家の邸内を護衛してゐた、小作人組合に入つてゐない、青年團の青年たちや、消防組員までも、一應は取調べを受けた。

これは一つの暗示であつた。

地主共は、誰を信じてよいか？

12

13

消防組、青年團は、何のために護衛し、非常線を張り、且つ(調べられる)か？

家族の者とても、取調べを受けない譯には行かなかつた。片つ端から母を異にする兄弟姉妹の間に、何かありはしないか？ 最近の犯罪傾向が暗示する、骨肉相殺がないか？

人々は信ずる處を失つてしまつた。滅茶苦茶であつた。虚無時代であつた。恐怖時代であつた。

棍棒は、劍よりもピストルよりも怖れられた。

生活は、農民の側では飢饉であつた。検學に次ぐに検學であつた。だが、赤痢でもあるやうに、いくら掃除しても未だ何か氣持の悪いものが後に残つた。

「こんな調子だと、善良な人民を監獄に入れて、罪人共を外に出さなけりや、取締りの法がつかない」と、「天神様」たちは思はない譯には行かなかつた。

だが、青年團、消防組の應援による、縣警察部の活動も、足跡ほどの證據をも上げることが出来なかつた。

鷓の色乳

富豪であり、大地主であり、縣政界の大立物である本田氏の、頭蓋骨にひびが入つたと云ふ、大きな事實に對して、證據は夢であつた。全で殴つたのは現實の誰かではなくて、人魂でももあるやうだつた。

生靈や死靈に憑かれることは、昔からの云ひ慣はしであつた。そして、怨靈のため、一家が死滅したことは珍しくなかつた。だが、そんな怨靈も、樫の木の間で形を以て打ん殴つたものはなかつた。で、無形のものであるべき怨靈が、有形の棍棒を振ふことは、これは穩かでない話であつた。だが、困つた事には、怨靈の手段としての、言論や文字や、棍棒は禁壓が出来たが、怨靈そのものについては？こいつは全で空氣と同じく、あらゆる地面を蔽つてはゐたが、捕へるのに往生した。

下の關行きの、二三等直通列車が走つた。

彼は、長い時間を食堂車でつぶして、ビールの汗で體中を飴湯でも打つけられ
たやうに、ネチャつかせながら、彼の座席へ歸つた。處が、彼が座席の上に置いて

あつたバスケットは、そこに無かつた。

そこには、網棚から兵兒帶を吊して、首でも溢る時のやうに、輪の中へ顎を引つ
かけて、グウグウ眠つてゐる男があつた。

車室はやけに混んでゐた。デツキには新聞紙を敷いて、三四人も寝てゐた。通路
にさへ三十人も立つたり、蟠つたりしてゐた。眼ばかりパチパチさせて、心は眠つ
てるのもあつた。東京の空氣を下の關までそつくり運ぼうとでもするやうに車室内
の空氣はムンムン沈澱してゐた。

「圖太え野郎だ。ハツハツハ、變つてやがらあ。首つ吊りしてやがらあ。はてな、
俺のバスケットをどこへ持つて行きやがつたんだらう。おや、踏んづけてやがら、
畜生！ 叶はねえなあ、こんな手合にかゝつちや。たが、この野郎白つばくれて、
網を張つてやがるんぢやねえかな。バスケットの中味を覗いたのたあ違ふかい？
冗談ぢやあねえぜ、餘りやり方がしぶといや。薄つ氣味が悪いや。何だい、馬鹿に
してやがら、未だ小僧つ子ぢやないか。十七かな、八かな。可愛い顔をしてらあ、

ホラ、口の中に汗が流れ込まあ。」

彼は、暫く凭れによりかゝつて、少年を観察してゐた。

少年は疲れた顔を、帯の輪の間に突つ込んで、深い眠りに眠りこけてゐた。

「兄さん。おい、兄さん。冗談ぢやないぜ息が詰つちまふぜ。」

彼は、暫くして少年を揺り起した。少年は鈍く眼を開いた。そして両手をウーンと張り上げた。隣の人の耳を小突きながら、隣の人は小突かれると、反対側の通路の方へガツクリと首を傾けた。

「ごうしたんだい。兄さん、首つ吊りをするつて譯ぢやねえだらうな。」

「うん。」

少年は再び眼を瞑らうとした。

「おい、兄さん。そりやお前のバスケットかい？」

彼は少年の踏んでゐるバスケットを顎でしやくつて見せた。

「ぢや、お前のかい？」

少年は眼を瞑つたまゝ、聞きかへした。

彼は度膽を抜かれた。てれかくしに袂から敷島を出して火をつけた。

(何てえ奴だ！ 途方もねえ野郎だ。え、「ぢや、お前のかい？」つてやがる。それぢや一體あのバスケットは、誰のものなんだい？ 尤もさう云やあ、此小僧つ子の云ふ事がほんとは、ほんとなんだがな。それや、俺のものでもねえし、又此小僧つ子のでもねえんだ、だが、そいつを此小僧奴知つてやがるんだらうか。知つてなきや、そんな無茶苦茶な事が云へる筈がなからうぢやないか。え、都合によると、こりや危いかも知れねえぞ。)

だが、彼はそこでへまを踏むわけには行かなかつた。それが誰のものだらうが、そのバスケットは自分のものでなければ此場合を收拾する事が出来なかつた。

「だつて兄さん。そりや俺んだよ。踏んづけちや困るね。」

「そんな大切なものなら、打つ捨らかしとかなけやいゝぢやないか。」

少年は眼を瞑つたまゝ、バスケットから足をとつた。

生々しい眉間の傷のやうな月が、薄雲の間にひつかゝつてゐた。汽車は轟然と闇を切り裂いて飛んだ。

「冗談云ふない。俺だつて一晩中立ち通したかねえからな。」

「冗談云ふない。俺だつてバスケットを坐らせといて立つてゐたくねえや。」

「チョツ、喧嘩にもならねえや。」

「當り前さ。」

少年は眼を開いた。そして彼をレンズにでも収めるやうに、一瞬にしてとり入れた。

「喧嘩にやらねえよ。だが、お前なんか向うの二等車に行けよ。その方が樂に寢られるぜ。寒くもねえのに羽織なんか着てる位だから。その羽織だつて、十圓位はかゝるだらう。それよりや、二等に行つて、少しでも三等を樂にしるよ。此三等を見ろよ。塵溜だつてこれよりや隙があらあ。腐らねえで行く先まで着きや不思議な位だ。俺たちや、明日から忙しいから、汽車の中で寢て行き度えんだよ。」

「どこへ行くんだい？」

「お前はスパイかい？」

「え？」

「分らねえか、警察の旦那かつて聞いてるんだよ。」

彼は喫驚すると同時に安心した。

(こいつは、仲間かも知れねえぞ！)

「俺は商人だよ。」

「さうかい？ 何しろ、此車にやスパイが二十人も乗つてるんだからな。俺はまたお前もさうかと思つたよ。」

「どうしてだい？」

だが彼は今度は愈々びつくりした。

(おどかしやがる。二十人！ 穩かぢやねえや。だが、どうして此小僧がそれを知つてゐるんだ。どこまで此小僧は人を食つてやがるんだらう。)

「ナアに、俺たちに一人づゝ跟いて来たんだよ。餘り數が多いから一々顔が覚えてられねえんだよ。向うだつて引繼ぎの時にや、間違つくだらうよ。ほら、」
少年は通路に立つてゐる乗客の方を、顎でしやくつて見せた。

「あれが、御連中だよ。」

（だが、何だつて此小僧奴は子供らしくねえんだらう。まるで四十になる俺と同年配でゝもあるやうな、口の利き方をしやがる。それに云ふ事だつて、理窟許り云つてやがる。顔付きにも似合はねえ野郎だ！ だが、待てよ。「俺たちに一人づつ附いてる、つてやがつたな。然らば何だ？ こいつ等は？——彼は、然らばと云ふ言葉を、刑務所で覺えたのであつた。——然らばこの小僧は一體何だ？」一人連れてゐてその癖、網棚から首なんぞ吊るしやがつて、横柄な顔をして大鼾で寝てやがる。何を爲たんだ、何を。何者だ？）

「それで何かい。その、お前は一體何をやらかしたんだね？」

「何もやらかしやしねえよ。これからやりに行く處なんだ。だが、お前さん、何だ

ぜ。俺と話しをしてるとお前さんの迷惑になるかも知れねえぜ。」

（此野郎。俺の言ふ事を先に言つてやがらあ。だが、どうだい、危ねえ處に乗り込んでもんぢやねえか。いけねえ。）

「そりや又どう云ふ譯でかい？」

「譯なんぞあるもんかい。俺たちと話ししてりや、片つ端から跟けられるに決つてらあね。」

「だから、お前は一體何だ、と聞いてるんだよ。」

「俺かい？ 俺は労働者だよ。」

「労働者？ ぢやあ堅氣だね？ それに又何だつて跟けられてるんだい？」

「労働爭議をやつてるからさ。食へねえ兄弟たちが闘つてるんだよ。」

「フーン。俺にや分らねえよ。だが、お前と口を利いてると、ほんとに危なさうだから俺は向うへ行くよ。そのバスケットを取つてくんなよ。」

「ほら。氣をつけなよ。」

「お前の方が、氣をつけるよ。飛んでもねえ話だ。」

彼は、針でも踏みつけたやうに驚いた。

（氣をつけろつてやがる。奴は俺を見抜いてやがるんだ。物騒な話だ。）

彼はバスケットを提げて、食堂車を抜けて二等車に入った。

二等車では、誰も坐つてもゐない座席に向つて、煽風機が熱くなつて唸つてゐた。

彼は煽風機の風下に腰を下した。空氣と座席とが、そこには十分にあつた。

焙られるやうな苦熱からは解放されたが、見當のつかない小僧は、彼に大きな衝撃を與へた。

（あの小僧奴、俺の子供位糺つ子の癖にしてやがつて！）それでゐて、その小僧つ子の見てゐ、感じてゐ、思つてゐ、言ふ言葉が、（親位な俺に解らねえなんて。）

彼は車室を見廻した。人は稀であつた。彼の後から跟いて入つて來た者もなかつた。

（さうにも疑もかけられなかつた。危え瀬戸際だつたよ。だが、小癩な小僧だよ。

あいつは。）

彼と、彼を愕かした少年との間には、言葉の異ふ二つの國民位の、距離があつた。

彼には、その少年は、云はゞ怪物であつた。警察や、町などで、彼の知つてゐた少年とは似てもつかない、妙な譯の分らないものであつた。それは、何か知ら追つかげられるやうな、切迫した感じで彼をつゝ突いた。彼は、その本能的な、その上、いつでも人生の裏道を通らねばならないことから來る、鋭い直感で、大抵一切のことを了解した。今度はどの位だな、と思つてゐると、大抵刑期はそれより一年とは違はなかつた。——一年の人間の生活は短くない。だが、無頼漢共を量る時には、一年は概念的な數字に過ぎなかつた。その一年の間に、人間の生活が含まれてゐるミ云ふ事は考へられなかつた。それは自分には關係のない一年であつた。その一年の間に、他人の生活の何千年かを、蛹にしてしまふ職業に携つてゐる、その人間の一年では絶対にないのであつた。その人は、社會的に尊敬され、家庭的に幸福でありながら、他の人の一生を棒に振ることも出來た。彼には三百六十五日の生活があ

る！ 彼には、三百六十五日の死がある。――

今度は、三ヶ月は、娑婆で暮したいな、と思ふと、凡そ百日間は、彼には娑婆の風が吹いた。家の構へで、その家がどんな暮し向きであるかを知つた。顔や、帯の締め工合で、そいつが何であるかを見て取つた。

だが、あの不敵な少年は、全で解らなかつた。

（あいつは、二つのメリケン袋の中に足を突つ込んでゐた。輪になつた帯の間から根性に似合はない優しい顔が、眠つてゐた。何を考へてるんだか、あの眼の光は俺には解らなかつた。且那衆のやうに冷たくは光らなかつた。憤つて許りゐるやうな光でもなかつた。涙を溜めてもゐなかつた。だが、俺を一度でおどかしやがつた。フン、俺も大分焼が廻つたな。あんな小僧つ子の事で、何だ、グズグズ氣をとられてるなんて、他事ぢやねえや、こちとらの事だ。間誤つてると、細く短くなつちやふぞ。）

24 汽車が、速度をゆるめた。彼は、眠つた風をして、プラットフォームに眼を配つ

25 た。プラットフォームは、彼を再び絶望にも近い恐愕に投げ込んだ。

白い制服、又は私服の警官 四五十人もそこに網を張つてゐた。

汽車はピタツと止つた。

だるい、ものうい、眠い、眞夜中のうだるやうな暑さの中に、それと似てもつかない渦巻が起つた。

警官が、十數輛の列車に、一時に飛び込んで來た。

彼は全身に惡寒を覺えた。

（畜生！ 大袈裟に來やがつたな。よし、かうなりややくそだ。）

恐愕の惡寒が、激怒の緊張に變つた。七首が彼の懷で蛇のやうに鎌首を擡げた。が、彼の姿は、すっかり眠りほうけてゐるやうに見えた。

制服、私服の警官隊が四人、前後からドカドカツと入つて來た。便所の扉を開いた。洗面所を覗いた。が、そこには誰も居なかつた。

霧の色乳
『この車にや居ない！』

「これは二等だ、三等に行け！」

「發車まで出口を見張つてろ！」

二人の制服巡査が、兩方の乗降口に残つて他のは出て行つた。

プラットフォームは、混亂した。叫び聲、殴る音、蹴る音が、仄暗いプラットフォームの上に擴げられた。

彼は、懐の七首から未だ手を離さなかつた。そして、兩方の巡査に注意しながらも、ホームを見た。

改札口でなしに、小荷物口の方に向つて、三四十人の人の群が、口々に喚き、罵り、殴り、髪の毛を引つ掴みながら、搖ぎ出した岩のやうにノロノロと動いて行つた。

その中に、(見當のつかなかつた小僧)が小荷物受渡臺の上に彼自身でさへ驚くやうな敏捷さで、飛び上つた。そして顔中が口になるほど、鋭く大きい聲で叫んだ。

26

帽子を引き千切るやうにとつて、そいつを下に叩きつけた。メリケン粉の袋のやうなズボンの一方が、九十度だけ前方へ撥ね上つた。その足の先にあつた、木魚頭がグラツと揺れると、そこに一人分だけの棒を引き抜いた後のやうな穴が出来た。

「同志！ 突破しろ……！」

少年が鋭く叫んだ。と同時に彼の足は小荷物受臺から擲はれて、尻や背中ゴツンゴツンと調子をとりながら、コンクリートの上へ引きずり下された。

汽車は靜に動き出した。兩方の乗降口に立つてゐた制服巡査は飛び下りた。

(畜生！ 辨當も買へやしない。何だ、あれは、一體。)

思はず、彼は深い吐息をついた。そして、自分の吐息の大きさに慌て、車室を見廻した。乗客は汽車が動き出すと一緒に、長くなつたり、凭れに頭を押しつけたりして、眠りを續けた。

霧の色乳

(何者だらう？ あいつ等は一體。護送されてゐるのなら、捕繩をかけられてゐなけりやならないんだのに。奴等は手ぶらでゐるやがつた。解らねえ。俺にや分らねえよ。(突破しろつ！)と、あの小僧奴怒鳴りやがつた。何だつて突破しろなんて云ふ

んだ。(遁けろ)つて何故云はねえんだ。何が何たかさつぱり譯が分らねえ。何分、いゝ度胸だよ。蹴飛ばしやがつたな。ボコツと頭が鳴つたどらうな。氣持ちは悪くねえさ。いゝ氣味だよ。さころで俺は、えゝつミ、どうしたらいゝかな。この附近で一仕事爲た方がよかないかな。何しろ、あんなにあそこに集つてゐる處を見りや、外の處が手薄になつてゐるに決つてゐる。それに決つてゐる「それに近くでやりやあ、あいつ等が目星をつけられらあな。さうだ。何でも構はねえ。此次に止つた處で降りてやる。だがあいつ等たあ一體何だ? 途方もねえ大仕掛な野郎だちだ。二十人も二塊りになつて、乗り込んで行きやがる。全で滅茶苦茶だよ。捕るのを覺悟で行きやがるんだもんな。俺はそんなへまはやらねえよ。一人でなきや駄目さ。それにしても、奴等は俺は仕事が違ふらしいや。でなげや、一人が一人づつ連れて歩いてて仕事が出来る譯はないからな。」

28 汽車は沿岸に沿うて走つた。傷口のやうな月は沈んだ。海は黒く眠つてゐた。

彼の、先天的に鋭い理智と、感情とは、小僧つ子の事で一杯になつてゐた。

29 四十年間、絶えず彼を殴りつゝけて來た官憲に對する、復讐の方法は、彼には唯一つしかないと思つてゐた。そして、その唯一つの道を勇敢に突進した彼であつた。その戦術は、彼の(家)に歸れば、どの仲間もその方法に據つた、唯一の道であつた。

が、乳色の、磨硝子の靄を通して灯を見るやうに。監獄の厚い壁を通して、雑音から街の地理を感得するやうに。彼の頭の中に、少年が不可解な光を投げた。

靄の先の光は、月であるか、電燈であるか、又は窓であるか、は解らなかつたが光である事は疑ふ餘地がなかつた。

光を求めて、蟲は飛んだ。

彼は蟲のやり方を取つた。が、人は總て蟲のやり方でやらねばならないと云ふ法はなかつた。外のやり方もあつた、が彼には、外のやり方が解らなかつた。

(譯の分らねえ小僧たちだよ、奴等は俺つちとは異つた眼を持つてやがるんだよ。無氣味な、未恐しい小僧たちだよ。そのくせ、いやに明けつ放しでゐやがる。全

で、良い事でもしてるやうな調子だよ。俺にや、残念だが解らねえよ。怪我のねえやうにやつて呉れ。

汽車は走り續けた。

彼は、警官の密集を利用しようとする、本能的な且つ職業的な、彼一流の計畫を忘れて、その小僧つ子に、いつか全幅の考へを奪はれてしまつてゐた。

浚
渫
船

私は行李を一つ擔いでゐた。

その行李の中には、死んだ人間の臟腑のやうに、「もう役に立たない」ものが、詰つてゐた。

ゴム長靴の脛だけの部分、アラビアンナイトの粟粒のやうな活字で埋まつた、表紙と本文の半分以上取れた英譯本。坊主の除れたフランスのセーラーの被る毛絲帽子。印度の何ミか稱する貴族で、デツキパツセンジャーとして、アメリカに哲學を研究に行くと云ふ、青年に貰つた、ゴンドラの形と金色を持つた、私の足に合はない靴。刃のない安全剃刀ブリキのやうに固くなつたオバーオールが、三着。

『畜生！ どこへ俺は行かうつてんだ。』

櫂の盆見たいな顔を持つた、セコンドメイトは、私と並んで、少し後れようと試みながら歩いてゐた。

32
『へッ、俺より一足だつて先にや行かぬえや。後ろ頭か、首筋に寒氣でもするんかい』

33
私は又、實際、セコンドメイトが、私の眼の前に、眼の横ではいけない、眼の前に、奴のローラー見たいな首筋を見せたら、私の擔いでゐた行李で、その上に載つかつてゐる、だらしないマツト見たいな、「どあたま」を、地面まで叩きつけてやらう！ と考へてゐたのだ。

『で、お前はどこまでも海事局で頑張らうと云ふ積りかい？』

ミ、セコンドメイトは、私に訊いた。

『箆棒奴。愚圖々々泣言を云ふない。俺にや覺悟が出来てるんだ。手前の方から喧嘩を吹つかけたんぢやねえか』

私は、實は歩くのが堪へられない苦しみであつた。私の左の足は、踝の處で、釘の抜けた蝶番見たいになつてゐたのだ。

『お前は、そんな事を云ふから治療費だつて貰へないんだぞ。それに俺に食つてかかつたつて、仕方がないぢやないか、な、ちゃんと嘆願さへすれば、船長だつて涙金位寄越さないものでもないんだ。それを、お前が無茶云ふから、船長だつて憤る

んだ。』

セコンドメイトは、栗のきんとん見たいな調子で云つた。

そのきんとんには、サツカリンが多分に入つてゐることを、私は知つてゐた。その上、猫入らずまで混ぜてあつたのだが、兎に角く私は、滅茶苦茶に甘いものに飢ゑてゐた。

だものだから、ついうつかり、奴さんの云ふ事を飲み込まうとした。

涎でも垂らすやうに、私の眼は涙を催しかけた。

『馬鹿野郎!』

私は、力一杯怒鳴つた。セコンドメイトの猫入らずを防ぐと同時に、私の欺され易いセンチメンタリズムを、怒鳴りつけた。

倉庫は、街路に沿うて、並んで甲羅を乾してゐた。

34 未だ、人通りは餘り無かつた。新聞や牛乳の配達や、船員の朝歸りが、時々、私たちと行き違つた。

35

何かの、パンだとか、魚の切身だとか、巴焼だとかの包み紙の、古新聞が、風に捲かれて、人氣の薄い街を駆け抜けた。

雨が來さうであつた。

私の胸の中では、毒蛇が鎌首を投げた。一步々々の足の痛みと、『今日からの生活の悩み』が、毒蛇をつつついたのだ。

『おい、今んになつて、口先で誤魔化さう、つたつて駄目だよ。剝製の獸ぢやあるめえし、傷口に、たゞの綿だけ押し込んで、それで傷が癒りや、醫者なんぞ食ひ上げだ! いゝか、覚えてろ! 萬壽丸は室濱の航海だ。月に三回はいやでも濱に入つて來らあ。海事局だつて、俺の言ひ分なんか聞かねえ事あ、手前や船長が御詫を並べるまでも無えこつちで知つてらあ。愈々どん詰りまで行きやあ、俺だつて蟲けられた違ふんだからな。さうなりや裸と裸だ。五分と五分だ。松葉杖ついたつて、折つ衝つて見せるからな。』

船 漕 渡

松葉杖! 私はその時だつてほんたうは、松葉杖を突いていなければ、歩けない

ほどに足が痛く、傷の内部は化膿してゐたのだ。

私は、その役にも立たない、腐つた古行李をもう擔いで歩くのが、逆も重くて、足に對して堪へられない拷問になつて來た。

道は、上げ潮の運河の上の橋にかゝつてゐた。私は橋の上に、行李を下してその上に腰をかけた。

運河には浚渫船が腰を据ゑてゐた。浚渫船のデッキには、石油鑛の七輪から石炭の煙が、いきなり風に吹き飛ばされて、下の方の穴からペロペロ、赤い焰が舌なめずりをして、飯の炊かれるのを待つてゐた。

團扇のやうな胴船が、浚渫船の横つ腹へ、眠りこけてゐた。

私は両手で顎をつゝかつて、運河の水を眺めてゐた。木の切れつ端や、古俵などが潮に乗つて海から川の方へ逆流して行つた。

36
セコンドメイトは、私と並んで、私が何を眺めてゐるか検査でもするやうに、私の視線を追つかけてゐた。

37
私は左の股に手をやつて、傷から來た淋巴線の腫れをそうつと撫でた。まるで横痃でもあるかのやうに、そいつは痛かつた。

——横痃かも知れねえ。弱り目に祟り目だ。悪い時や何もかも悪いんだ。どうなつたつて構やしない。——

『その代りなあ、淋しい死に方はしやしないからな。』

私は、ほつれた行李の柳を引き千切つて、運河へ放り込みながら、さう云つた。

『おい！ そんな自棄を云ふもんぢやないよ。それよりも、おとなしく「合意雁止め」にしてやるから、ボーレンで一ヶ月も休んで、傷を癒してから後の事は、又俺でも世話をしてやるからな。お前見たいな風に出ちや損だよ。長いものには巻かれろつてことがあるだらう。な、お前がいくら頑張つたつて、船長も云つたやうに、一億圓の船會社にや、勝つてつこないんだから。』

38
船 深 淺
セコンドメイトは、デッキの上とでは、レコードの両面見たいに、あべこべの事を云ひ初めた。詰らない事を云つて、自分が癩癩玉の目標になつては、浮ばれない

と思ひついたので。

「セキメイツ。長いものが。長いものゝ癖をして、巻かねえんだよ。巻かれた奴あ。ギユツと巻き締められて、息の根を止められちまはあな。ボーイ長（水夫見習）を見な奴あ泣寝入りと云ひたいんだが、泣寝入り處ぢやねえや、泣き死にゝ死んぢやつたぢやねえか。へッ、毛も生えないやうな、雛つ子ぢやあるめえし、未だ、おいら泣き死にはしねえよ。淋しい死に方なんざしたくねえや。」

「フン。強い事あ、もつと早くか、もつと遅く言つたらどうだい。ま、足でも癒つてからな。第一、お前い船長に云ふ事を俺に云つたつて、追つかない話だぜ。」

「いゝとも。船長だつてお前だつて、塵木葉なんだよ。」

私は、立ち上つた。

腰を下してゐた行李を擔ぎ上げた。

セコンドメイトは、私が行李を擔ぎ上げたので、二足許り歩いた。

私は、行李を運河の中へ、力一杯放り込んだ。

「へッ、俺等なあ、行李まで瘠せてやがらあ。ポシヤツてやがらあ。ドブンとも云はねえや。お前だつて俺だつて此行李と違やしないんだぜ。セキメイツ！」

行李は、へうきんな恰好で、水を吸つて沈むまでを、浮いてごみ屑と一緒に流れた。

「どうしたんだい。一體、お前氣でも狂つたんぢやないのか。」

セコンドメイトは、ポシヤツと云つた水音で振りかへつて、さう云つた。

「首なし死體を投り込んだんだよ。ありや腐つた臟腑だけつか入つてねえんだ。お前だつて、あの行李ん中へ入つてるんだよ。俺だつて、自分の行李がいらなくなりや、雇止めを食はさあな、へッ。さやうなら、御機嫌よう。首なしさん。だよ。ハツハツハハ。」

私は、齒を食ひしばつた。そして上脛を上の方へまくし上げた。行李は、私のやうにフラフラしながら、流れて行つた。

セコンドメイトは、私が、どんなに非常識な事をいつても、「憤つてはならないし

と心の中で決めてゐるらしかった。

——若し、今、こいつに火をつけたら、ダイナマイト見たいに、爆發するに決つてる。俺が海事局へ行つてから、十分に思ひ知らしてやればいゝんだ。それまでは、豆腐ん中に頭を突つ込んだ鱈見たいに、暴れられる丈け暴れさせとくんだ。——

セコンドメイトが、油を塗つた盆見たいに顔を赤く光らせたのから、私は、彼の考へを見てとつた。

私とても、言葉の上の皮肉や、自分の行李を放り込む腹癒せ位で、此事件の結末に満足や諦めを得ようとは思つてゐなかつた。

40 一生涯！ 一生涯、俺は呪つてやる、たとひどんなに此先の俺の生涯が慘めでも、又短かくても、俺は呪つてやる。やつゝけてやる、俺だけの苦しみぢやない、何十、何百、何萬、何億、の苦しみだ。「たとへ、お前が裁判所に持ち出したつて、こつちは一億圓の資本を擁する大會社だ。それに、裁判はこちらの都合で、五年でも十年でも引つ張れる。その間、お前はどうして食ふ。裁判費用をどこから出す。」

41 「ヘツヘツヘツ」と、吉武有と云ふ、鑄込まれたキャブスタン見たいな、あの船長奴、抜かしやがつた。抜かしやがつた。畜生！「どうして食ふ？ どうして食？」と奴はこきやがつた。

私は橋板の上へ、坐り込んでしまつた。

足と、頭の痛さとが、私を、私と同じ量の血にして橋板へ流したやうに、そこへ、べつたりへたばらしてしまつた。

——畜生！——

「セキメイツ！ 人間の足が痛んでるんだ、分らねえか、此ほけ茄子野郎！ 人間の足が、地についてる處が疼いてるんだ。血を噴いてるんだ！」

私は、頭を抱へながら怒鳴つた。

船 深 渡
セコンドメイトは、私が頭を抱へて濡れた海苔見たいに、橋板にへばりついてゐるのを見て、「いくらか心配になつて」覗き込みに来るだらう。「どうしたんだ、オイ、しつかりしろよ。ほんとに歩けないのかい」と、私の顔を覗き込みに来るだら

う。そして、私の頭に手をかけるだらう。オイ。

——手だけは、未だ俺は丈夫なんだからな。ポカツ！ と、俺は、奴の鼻に行かなくちやいけない。口ではいけない眼ならいくらかい。だが鼻が一等き、目があるからな。さまあ見やがれ、鼻血なんぞだらしなく垂らしやがつて。——

私は、本船から、舳から、棧橋から、こゝまでの間で、正直の處全く足を痛めてしまつた。一週間、全一週間、そのために寝たつきり呻いてゐた、足の傷の上この體を載せて、歩いたので、患部に夥しい充血を招いたのに違ひなかつた。

——どこにゐるんだか、生きてゐるんだか死んでるんだか知らないが、親たちが此態を見たら——

と、私は何故ともなく兩親の事を思ひ出した。

私の親が私にして呉れたのと、私の親ほどな年輩の世間の他人野郎とは、何と云ふひどい違ひ方だらう。

私は、頭を抱へながら、滅茶苦茶に澤山な考を、掻き廻してゐた。そして、私の

手か頭かに、セコンドメイトの手の觸れるのを待つてゐた。

私は、おそらく、五分間もさうしてゐた。だが、手は私に觸れなかつた。

私は顔を上げた。

私を通りすがりに、自動車に援け乗せて、その邸宅に連れて行つてくれる、小説の美しいヒロインも、そこには立つてゐなかつた。おまけにセコンドメイトまでも、待ち切れなくなつたと見えて、消え失せてしまつてゐた。

浚渫船の胴つ腹にくつゝいてゐた胴船の、船頭夫婦が、デッキの上で、朝飯を食つてゐるのが見えた。運轉手と火夫とが、船頭に何か冗談を云つて、朗かに笑つた。

私は靜に立ち上つた。

そして橋の手すりに肘をついて浚渫船をボンヤリ眺めた。

夜明け方の風がうすら寒く、爽かに吹いて來た。潮の匂ひが清々しかつた。次には、浚渫船で蒸気を上げるのに、ウンと放り込んだ石炭が、そのまゝ熔けたやうな

濃い烟になつて、私の鼻つ面を掠めた。

それは、總て健康な、清々しい情景であり、且つ「朝」の潑刺さを持つてゐた。船體の動搖の刹那まで、私の足の踝にジャツクナイフの、突き通るまでは、私も早朝の爽快さと、潑刺さとがあつた。けれども船體の一と揺れの後では、私の足の踝から先に神経は失くなり、多くの血管は斷ち切られた。そして、その後では、新鮮な潑刺たる疼痛だけが残された。

「オーイ、昨夜はもてたかい？」

フアンネルの烟を追つてゐた火夫が、烟の先に私を見付けて、デッキから怒鳴つた。

「持てたよ。地獄の鬼に！」

私は怒鳴りかへした。

「何て鬼だ。」

「船長つてえ鬼だつたよ。」

「大笑ひさすなよ。源氏名は何てんだ？」

「源氏名も船長さ。」

「早く歸れよ。ほんとの船長に目玉を食ふぜ。」

「歸る所なんかねえんだよ。ペイドオフ（馘首）の食ひたてなんだ。」

浚漉船のデッキから、八つの目が私に向いた。

「何丸だ？」

「萬壽丸よ！」

「あんな泥船ならペイドオフの方が、よつ程サツパリしてらあ。いゝ事をしたよ。」
彼等は、朝の潮に洗はれた空氣に相應しく快活に笑つた。

それは、負傷さへしてゐなければ、火夫の云ふ通りであつた。だが、今は私は、一錢の傷害手當もなく、おまけに懲戒下船の手續をとられたのだ。

もう、セコンドメイトは、海事局に行つてゐるに違ひない。

浚漉船は蒸汽を上げた。セーフチーワルヴが、慌てゝ呻り出した。

46
運轉手がハンドルを握つた。静寂が破れて轟音が朝を掻き裂いた。運轉手も火夫も、鋭い表情になつて、機械に吸ひ込まれてしまつた。

——遊んでちや食へないんだ。だから働くんだ。働いて怪我をしても、働けなくなりや食へないんだ！——

私は一つの重い計畫を、行李の代りに背負つて、折れた齒のやうに疼く足で、棧橋へ引つ返した。

——一六二六、七、一〇——

田舎者が都會を見る

田舎から、東京へ出て来ると、先づ、人間の『霜寄り』してゐるのには、びつくりさせられる。

私などは、言はず、鐵のボールのやうに、固くて、まん圓い神經で出来上つてゐる位のものだが、それでも、銀座や、淺草などへ、まかり間違つて飛び込まうものなら、家の中へ飛び込んだ雀見たいに、まごついてしまふ。

驚く勿れです。電車、自動車、モーターサイクル、自轉車。そいつが字義通り、競争場を走つてゐるのだから堪らない。

よござんすか。煙草が買ひたくなる。電車通りの向う側でないと、見つからないとする。バット一つで、丸い鐵丸の一固りが瘠せた位に、氣を揉まなけりやならな

し。
車道はこれでよろしい。一先づ行着いたことにしても、人道と来ると厄介だ。

『人道』ですよ！

48 警視廳などでも、どんな心算で云つてゐるか知らないが、『人の通るは左側』なん

49 て、立札が立つてゐますね。

その人道なんだ。

左側さへ通つて呉れれば、人道は、正しく秩序整然、うまく通れるだらうと思ふんだが、右を行くのもある、中間を行くのもある。後しざりして來るのがある。停頓してゐるのがある。

別嬪がある。不別嬪がある。金持がある。貧乏人がある。不具者がある。迷子がある。捨兒がある。自殺者がある。手をつないで歩く、羨ましい限りの一對がある。馬鹿がある、狂人がゐる。

消防自動車の、いやにひつかき廻す様な警笛が鳴る。機關銃のボンボン言ふ音が鳴る。夕刊賣が悲鳴を上げる。

外へ出ると、ひどく揉みくたになるかと思つても、下宿にちつとしてゐれば、ミイラになる。

だが、その下宿だつて穩かぢやない。

焼き直した方がいゝだらう。
幾度もやり直してゐる中には些こはいゝ形のもものが生れて来るだらう。

——一九二六、四、九——

前の家のおかみさんが、筑前琵琶を、藝術家的興奮を持つて、雨垂の如くにかき鳴す。子供が憤る。隣のM女學校では、唱歌の先生が、お産の時のやうな聲を出す。數百の女學生が、必要に迫れるでもなく、そいつを真似る、隣室の學生は女中を口説く、
それもいゝ。これもいゝ。
だが、貧乏がいけない。
打ち壊された硝子の容器が、も一度埵埵に入れられて、すつかり新らしくならない限りは、いゝ形にならない様に、私と云ふものも、一度も二度も壊れた奴を、プロパイプで吹きつけたり、鋸止めにしてあるんだから、どうも、きちんとしてゐない。

と同様に、人通も、車道も、ツギハギだらけで、決してきちんとしてゐない。
なあに、一定量の硝子を、埵埵に入れて溶かしたつて、そんなに減りやしない。
私も、焼き直さなけりや駄目かと思つてゐる。

猫

さうだ、思ひ出した。

こんな夢だった。

私は、どうして牢舎から出たんだか、そこん處はハッキリしなかつたが、何でも、巢鴨の刑務所から、豊多摩刑務所へ行くのであつた。

何しろ、話が夢なんだからあり得ないことがある。

一人で私は歩いてゐた。朝だつたか、夕方だつたか分らなかつた。

生えたままの竹を折り曲げて垣にして、中には竹と大木とが、眞つ暗に茂つてゐた。片つ方は明けつ放しの畑であつた。その間に、竹垣に沿つて道が、白つほく、その癖妙に懐しく、うね／＼と續いてゐた。

その森が、護國寺の杜なんだ。と、私は思ひ込んでゐた。

54
——そんな杜や道は、護國寺なんぞにありはしないんだが、私は夢の中で、どうしたつてこりや護國寺の杜に相違ない、と思ひ込んでゐたのだつた。さう思ひ込むのには譯があつた。私の居た監房の窓から、遠い時は富士が見えたり、近い時は森

の梢が見えたんだ。

富士がいやに上品振つて、箱根や伊豆共を、見下してゐたり、いやにセンチメンタルに雲の上に額だけ出してゐたり、馬鹿に豪壯に雪の肌の中の眞黒い襷の影を織つて、表現派の繪に見るやうな姿を見せたりした。ところが豆腐屋のラツバや、子供たちの聲や、どこかで小學校の合唱や、が聞えて来るものだから、い／＼にはい／＼が富士は矢つ張り私に遠かつた。それよりも、手近かな、その森の梢の下か、その周りにある『人間の自由』な生活が欲しかつた。何しろ、『自由』と云ふものが、半鐘の音にも、豆腐屋のラツバにも、飛行機のプロペラの響にも、ありとあらゆる音にくつゝいて、窓から飛び込んで来るのだから、森の梢が懐しくてやり切れなかつた。今になつて考へて見れば、刑務所の塀が嚴然と區切つてゐる程、それほどひどいかけ離れた、自由と拘束だとも思はれない。けれども監房にゐる時は、禁錮の場合では、生活全體が『頭』の生活である。出る時に體重が一匁も減つてゐないとしても、足は蚊の脛のやうに瘠せてゐる。その足の肉が、眞逆頭にまで上りはしない

だらうが、兎に角足だけは斷乎として瘖せてゐて、歩くのにフラインクする。そこで、人間が、頭丈けの生活をする時になると、頭と云ふ奴は厄介である。出口のないコンクリートの箱の中でも、考へだけはどん／＼透して、その外の『社會』を描き出すのだ。

だから、家賃を拂つて住んでゐる場合でも、夢は突飛なものだから、況して一切合財國庫に負擔させてゐる夢が、突飛であるのは、止むを得まい。――

その、護國寺の杜に沿うた、夢の道を、氣も輕々と私は歩いてゐた。歩く、と云ふことが、然も、どこまでも自由に歩ける、と云ふことが、私を詩

人のやうに、フフ／＼と涙ぐましい風で包んだ。

それなのに、矢つ張り私は赤いツンツルテンの獄衣を着てゐた。此、赤い吸取紙の古ぼけた様な色の獄衣は、どうしたつて、『自由』の社會を歩くのには、ふさはしいものではなかつた。

「然し、誰が俺に、豊多摩監獄に使に行くやうに吩咐けたんだらうか？ そして、その使の用向は何だつただらうか？ そんな譯があるだらうか？ 囚人をたつた一人で使に出すなんて！ そんなに俺は信用されてゐるんだらうか。俺が、このまゝ、ファイとどつかへ行つてしまはないで、用事を済して、ノコ／＼、あの重つ苦しい鐵門を潛つて、歸つて來るなんて！ 教誨師だつて、考へるだらうか？ それとも俺を馬鹿にしてるんだらうか？ きつちにしたつて俺は歸るには歸るんだが、然し此俺でさへ、今考へついた事を、俺より先に、誰が見抜いたんだらうか。若し看守長にしる、教務主任にしる、醫者にしる、そんなことを見抜いたとすりや、恐しい譯だぞ。囚人つてもものは、考へるまでもなく、みんな、今俺の考へるやうなことを、定規で線を引くやうに一直線に考へるもんだらうか。

そこでは、一つ小屋の中にある雞のやうに、總ての囚人が、同じやうな便を垂れる。そこでは、三千の人間が三千の小豆粒見たいに萬別がない。だが、考へだけは？」

そんな風な取りとめのない事を、私は考へながら歩いてゐた。

ところが、私は急に腹が空いて來た。腹が空いて來たと云ふよりも、飢餓のために、足が前へ一足でも出ることを、厭がり始めた。

私は、路傍の芝生へ腰を下した。

そこへ、道の向うから、若い女と、お爺さんが、甲掛け脚絆と云ふ恰好で歩いて來た。まるで、昔の東海道五十三次の氣分そのままであつた。

「何か私に食べるものを分けて下さいませんか。」

私は、二人の自由人に云つた。

「ほう、お若い方。お腹が空いてぢやと見えるの。これ、あの糍を出してお上げ。」

私は、娘の手から、糍を受け取つた。

その糍は、帆布で出來た、薄汚い袋からとり出された。

「お若い方。あなたは妙な着物を着てゐられるやうだが、その恰好で旅はなります

まいぞ。道は悪い。人目は多い。多い人目の中には毒を含んだ瞳もある。氣をつけてござらつしやい。」

「ありがたう存じます。」

私は、掌にある糍を、バクリと口へ投げ込みながら、禮を述べた。

私は、畑の方を背にして坐つてゐたので、何かのはずみで、畑の後ろの黒い土の中に、轉がつた。

そして、そこで夢は覺めた。

が、私は、糍の味は未だに忘れられない。ほんとに、糍を食つたのではなかつただらうか？ と今でも、私は、糍の味の點で、夢と現實との間を彷徨してゐる。

散

步

ブラ／＼歩く——私は、自分の運動のためにこいつをやる。
靖國神社の池の端であつた。

私は、そこに腰を下してゐた。

私の隣には、二人の丁稚らしい青年が、矢つ張り黙つてかけてゐた。

春めいた風が、噴水の水を、風のまに／＼吹き飛ばしてゐた。

鴨が遊びでゐた。龜の子が甲羅を干してゐた。日が、走つて行く雲の間から、時々覗き見した。小綺麗な泉水の中の築山であつた。

が、二人の丁稚らしい青年は、ベンチに作りつけられたやうに、腰かけたまゝ、何を見るときもなく、眼を据ゑてゐた。

二人の顔は、ノートの表紙のやうに、灰色に青ざめて、汚れてゐた。

も一人、能樂堂の方から、その二人の丁稚と些も違はないやうに青ざめた、小僧風の少年が來た。

彼はベンチへ、疊まれる提灯のやうに、へたばつた。

「この人たちに血が流れてゐるだらうか」と、私は、その三人を交替に眺めながら考へた。

「血の流れてゐない」やうな、青ざめた、瘡せた若い人々を、私は至る處で見ると、

山でも、鑛山でも、坑山でも、汽船でも、工場にも、家庭にも、警察でも、監獄でも、都會でも、街でも、公園でも。

そして、私は、青ざめた人々に心を動かされる。

だが、此、私はどうだ！

私も泥炭のやうな色をしてゐる！

ベンチの人たちも、私も、毎日、毎時、の生活がマイナスになつて行きつゝあるのだ。

過度の労働と、生業とその執れも、人々から血を奪つて行く。

この血の集つた處に、現代の文化が、光り輝いてゐる。

二人の丁稚らしい青年は立ち上つた。

そしてヨロ／＼歩き出した。全で彼の人生を歩くやうに。
私は、二人の行方を見送つてゐた二人の出て行く道は、塀に遮られて見えなかつた。

——一九二六、三、一五——

校正係

赤煉瓦の五層樓が聳えてゐた。

附近の、同様な大建築は、白、或は灰色であつた。

その附近一帯は、永久に『今』と同じ形を備へて、残り、榮えるであらうと思はれた。

總ての建造物は、大地に、巨木のやうに根を下してゐた。根許は、コンクリートや、アスファルトで、踏み固められてあつた。

赤煉瓦の建物は、眞夏の陽の光の中に、穩かな息遣ひをしてゐた。

自動車は、水蜘蛛のやうに輕快に、スル／＼と出たり、入つたりした。

蟻に似た黒い、又は、白蟻に似た白い、生物が、ゾロ／＼出入りした。

それらの情景は動かすことの出来ないものであつた。

昨日もさうであつた。去年もさうであつた。雨が降つても雪が降つても、風が吹いても、そこでの情景は些も違はなかつた。

66 春の風と、夏の日と、歳月とが、總ての森や林を大きく、暗く育てるやうに、地

67 上の、一つの平野と、一つの大洋との交錯し合つた、ある地點へ、夢のやうに芽生えた一つの都會が、成長し、擴がり、肥つて行つた。

總ての森林が、その枝を張り、その面積を擴げ、繁れば繁るほど、その森の内部は暗くなり、濕つて來るやうに、此地上の此都會も、擴がり、高まり、キラピヤカになるに従つてその内部が、暗くてジメ／＼し初めて來た。

太陽の光は、建築の外部で遮られて、内部は電燈が燈つてゐた。

地下室では、穴の中に落ちた夜盜蟲のやうに、人々がウヨ／＼と、匍ひ上らうと徒らな努力をしては落ちてゐた。

朝の八時頃であつた。

吸塵機に吸ひ込まれる塵埃のやうに、赤煉瓦の建物の中へ人々が吸ひ込まれた。

どの埃も、何の抵抗も試みなかつた。どの塵も揃つて同じやうな、形を持つてゐた。

この界限の、大建造物の間の谷底のやうな道路には、電車や自動車や、自轉車な

どが、尻と頭とをくつゝけるやうに、頻繁に走つてゐた。人間とても、馳のやうにすばしつこかつた。

木蘇氏は、これ等の建物や、交通機關や、馳のやうな人間の間に在つて、非常に不調和に見えた。中世紀の遺物である大とかげが生きたまゝ、現代に生存してゐるやうな、不調和さであつた。

彼は、國勢調査の時に、初めて發見された村の、長老のやうであつた。

夏羽織が、帯の一寸許り下で止つてゐた。

一寸五分も厚みのある朴齒の下駄の上に、木蘇氏の三十貫目は確にある、ピーア樽のやうな巨軀が載つかつてゐた。

山高帽が朴齒の下駄と、その位置に比例して、甚しい對照を見せてゐた。恐らく、十六本は骨のある洋傘を、彼はブラ下げてゐた。

彼は、赤煉瓦の建物と電車通りを距てた、反對側の歩道を歩いてゐた。

お上りさん、で彼があることは、都會の人は勿論、外のお上りさんでも、直ぐに

見てとる事が出来た。

「何でハア、こんねえに忙しいだんべえ。みんなハア、火事でもブツくらつたやうに、慌てゝかけまはつてるだ。」

と、木蘇氏の存在そのものが云つてるやうだつた。

木蘇氏の心の中に、今起りつゝある考が、その風采に相應はしいものであるか、或は、彼の前に、埃でも吹き出しさうに、未だ錆のつかない、乾いた感じのする、赤煉瓦の建物に相應はしいものであるか？

水に沿つた歩道を、二人の男女連れが、木蘇氏の傍を通りすぎた。

「まあ、考古學的存在ね。」

「ふん。現在の日本を代表してゐるね。」

「神経を使はないから、あんなに肥れるんでせうね。」

「膠は、神経を使はないやうだね。」

二人の會話の、以上の斷片が、木蘇氏に聞えた。

彼は顔の赧くなるのを覺えた。さう云つた風な批評こそ、自分の期圖してゐる處ではあつたが。

——若し、俺が瘡せてゐて、悍馬のやうに鋭い外觀を持つてゐて、絶えずギョロギョロ光る眼を持つてゐるとしたら、どうだらう、どんな俺の變装にも拘らず、俺は村長には見えないだらう。若し俺が、今俺の事を「豚」だと云つた青年紳士の様な、氣の利き過ぎた恰好をしてゐたら、俺は癖の悪い相場師としか見えないだらう。若し俺が瘡せてゐて菜っ葉でも着てゐたら、俺は「危険人物」と思はれるだらう。そんなだつたら一體何が俺に出来るのだ。俺は總てを捨てゝゐるのではないか。俺は一のものを得たい爲に總ての事を捨てゝ來たのではないか。だのにあんな觸見たいな奴の爲に顔を赧くするなんて。だが、俺が「考古學的存在」だとは、あの雖も甘い事を云つたもんだ。成程山高と羽織とは、過渡期を表してゐるさ。

さう云ふ、あのお二人は、然し何だ。ミイラに、時代の尖端的服裝を被せたのたあ違ふかい。構ふな。俺には一つしか道はないんだ。詰らねえ事に氣を使ふもんぢ

や無い。ところで、と、決行だ。——

木蘇氏は、電車道を、いきなり横切りにかゝつた。

彼は、電車や自動車、自動自轉車や自轉車などが、彼の直ぐ前で、鋭く鳴いたり、急停車したりするのを見た。そして、まるで室の中に飛び込んだ雀のやうに、慌てた。

その間も、絶えず、彼は赤煉瓦の建造物の出入口の方に、祕密な目を送ることを忘れなかつた。

考古的學存在は、文明の交通機關に混亂を捲き起した。

遂々、腕章を卷いた交通巡查が、木蘇氏の腕を捕へた。

「車道をウロ／＼しちやいけないね。危いぢやないか。」

かう云つた、深切な交通巡查は、彼を並木の下へ連れて行つた。

「どこへ行くのかね？」

「へえ、こゝへ來たんで御座いますだよ。」

「こゝへ来た！　ハツハツハ、それや分つてるさ。だが行く先はどこかね、と訊いてるんだよ。」

「へえ、此處へで御座いますだよ。」

彼は、指で、その前の赤煉瓦の建物を指さした。

「こゝへ？　ふん。何んな用事だね？」

「へえ、此人に、村の學校の事で御願ひがあつて、參つたんで御座いますだが、ハア、何しろ、車がでかく、飛びちがひますもので、ハア、御迷惑で御座いましたよ。」

「ふん。」

交通巡査は、木蘇氏が出した名刺と、木蘇氏とを、暫くの間比較討究した。

木蘇氏は、山高へちよつと、右手を上げてそれを持ち上げた。刺つたのに近い程短く刈つた頭が、閃光のやうに青く覗いた。そして、懐から淺草紙を出して、ツーンと鼻汁をかんだ。その紙を丁寧に疊んでゐる間に、交通巡査は、彼の職業的嗅感を了へた。

「ぢや、私と一緒にいらつしやい。」

「御面倒かけますだ。」

二人は、段々を上つて、その莊重な建物の中へ消えた。

交通巡査と、受付の係員との間に、一通りの話があると、木蘇氏から總長宛の電報も、ついてゐることが分つた。そして、總長自身が電話口から「直ぐに會ふから、應接間へ御案内申せ」と云ふ事であつた。

木蘇氏は、二階の應接間に導かれた。

彼は室内を見廻した。

どの壁も、コンクリートの固い壁であつた。室の中央にテーブルが一脚、裸のままで置いてあつた。そのテーブルの眞上へ、電燈がブラ下つてゐた。椅子が古物商の店へでも並べてあるやうに、いつからか換へられたことのない位置に、吸ひついたやうに置かれてあつた。テーブルの上には、鑕物の煙草盆と、呼鈴とがあつた。窓が、歩道の上を向いて開いてゐた。それ以外に窓はなかつた。

暑さは、だん／＼ひどくなつた。彼の、ビーム樽のやうな巨軀からは汗が洗ふやうに流れた。

——或は、いや、十中の九までは、これが俺の最後に見る事の出来る、景色だらう——

彼は、立ち上つて、通りに面した窓を明けた。

煙突から吹き上るやうな、生温い風が吹き込んだ。

窓の外には、濁つた空が続いてゐた。得態の知れない騒音が、彼の耳の中でも呻いてゐるやうに、聞えて來た。

道を越して、埃つほい水と、松とが青かつた。

——形は些も變つてはゐないのに、生活は此窓から飛び降りるやうに、どたん場に行つてゐる。澤山、歩いてゐる人々の心の中に、その人々の現在の危機が、果して自覺されてゐるだらうか？ 人々は、松や、水や、建物や、自分の仕事卓や、スリツパーや、エレベーターや、廻つて來る傳票や、ペン軸などが、今までと同じで

あるからと云ふ理由で、明日だつて同じやうに、「平和」だ、と思ひ込んでゐるのであるまいか。その人々の「誡首」の辭令が、重役の手許に既に出來上つてゐるかも知れないのに、その人々はのんきに「一切が昨日通りだ」と思つてゐるのだ。それと同じやうに、民衆から腕と足と、舌と頭とを掻き取つてしまはうとする、あの法律案が、大建造物の中で、大がかりに出來上つてゐるのに、民衆は未だ飛び起きようとはしない。

だが、俺は、のんきに考へてゐる時ではない。——

彼は、窓を一分間、一分間よりも、もつと短く開けて、目に映るものを見るともなく見、考へてゐたが、再びそれを閉めた。

そして、テーブルの處へ歸つて來ると、テーブルの下を、見た。

あつた。テーブルの脚を傳つて、ベルのコードが、どこか外の室へ通じてゐた。

——フン、蜘蛛の巣見たいだ——

彼は、懐から小型の鏡を出して、テーブルの足の上の方でそれをチョン切つた。

——だが、給仕が先にお茶を持つて来るだらうか？ それとも話してる中に、給仕がお茶を持つて来るんだらうか？——

此疑問は些細なものではあつたが、彼にとつては、重大な関係があつた。彼の豫想と違ふならば、彼の計畫の一切が根本から、覆されることになるのであつた。

——給仕が茶を捧げて入つて来る。給仕は自分の持つてゐる茶碗を、習慣に従つて、室の真ん中へ持つて出る。が、そこにはテーブルがない。俺は給仕から、盆ごと茶碗を引つたくると云ふ譯にも行かない。給仕は、そのまま出て行くであらう。そして、應接間のテーブルや椅子を、誰が、何時の間に片附けたかと云ふことを、給仕溜りで問題にするに違ひない。さうなると駄目だ！

だが、總長が先に入つて来る。テーブルも椅子も、あるべき處へ、チャンとあるが、俺が話しを初めて、ドアの處へ背を凭せかけて、決斷を迫る。となると、總長はテーブルを引つくりかへすだらう。ゴトツ！ と音がするだらう、續いて、バタバタ云ふだらう。さうなつたら駄目だ！ だが、——

彼は、一瞬間その考に惑つてゐた。が直ぐに跳ね上つた。

鑄鐵製の煙草盆を、ドアの開いた時隠れる位置に置いた。呼鈴はそのままにしてそのコードを、テーブルの足と床板との處で、も一度切りはなした。

そして、ありつたけの椅子を、入つて来て直ぐには分らないやうに、ドア寄りの壁の隅に積んだ。

——これでいゝ。すつかり、舞臺が廣くなつた。暑い。暑さの方で参りさうだ。

彼は、手拭で、顔や腋の下を拭いた。

彼は、ドアを背後にして、テーブルに両手を置いて、被告のやうに謹慎した恰好で立つてゐた。

ドアが開いた。

『ヤア、お待たせしました』

總長は、元氣よく入つて來た。

「オヤ／＼、小使は掃除のしつ放しで、椅子やなんぞ、未だ片附けたまゝになつてますね。これはどうも失禮しました。」

總長は、奥の方へ入つて、木蘇氏と向ひ合つて立つた。

そして、直ぐにベルを押した。

「今直ぐに小使を呼びますからね。どうもかう云ふ處は、自分の家とは違ひましてね。」

「いや、どうぞお構ひ下さいますな。」

かう云つた彼は、右の手をテーブルの上に置いたまゝ、懷から紙片を取り出した。「實は、これに御署名を、お願いしたくて上つたのですが。」

「何ですか？ まあ、ゆつくり故郷の事でもお聞きしたいのですがね。僕も忙しいので、ハツハツハハ。」

總長は紙片を擴げた。と、茹でられた蟹のやうに、彼の顔は赤く、硬直した。

「君は！」

その途端に、木蘇氏の腕が、デリックのやうに、テーブルを持ち上げた。そして、扉の抑へになる位置に下された。

テーブルが、その足を床につけるか、つけないかの間に、總長は彼に飛びついた。

木蘇氏は、右の手に、「そつくひ篋」のやうな形をした。鋭いメスを握つてゐた。

「總長！ 危いですよ。」

彼は小さな聲で云つた。

「あなたが聲を立てたり、これを否定なすつたりなされると、私は、武器を使はなければなりませんからね。」

早くしませう。考へる餘地はありません。

これを、あなたが承知すれば、あなたも、私も、又、何十萬の人間が救はれる。

あなたが拒めば、あなたも私も、何十萬の労働者たちまでも、血を流さねばならぬ。

その代り、あなたの署名は、何にも利用しません。そして絶対に祕密です。」

總長は、途中で止つた活動寫眞のやうに、恐しい場面を思はせる、張り詰めたポーズのまま、化石してゐた。

「だが、君、僕は立案者ぢやないんだよ。」

「それは關係がありません。」

「だが、君、それは効果がないよ。」

「それも關係はありません。」

總長が、隙を覗つて、木蘇氏の右手を襲撃しようと思ふことは、彼も、のみ込んでゐた。メスは總長の心臓の處へ、針のやうな尖端を、直角に向けてゐた。

總長は、少しでも時間を後らす必要を感じた。その中に誰か来るだらう。

「まあ、君、何だ、考へて見給へよ、公人としての僕が、そんな。君、それや君、全で無茶と云ふもんだよ。そりや、個人としては、僕も、同意しないことはないが、君。」

80 「個人の資格でいゝのです。署名して下さい。」

81 木蘇氏は、一足下つた。そして、右の手を左の袂に入れて矢立を取り出しかけた。

と、總長の體が、カッ飛ばされたボールのやうな勢で、彼の臍の邊に飛んで來た。

木蘇氏は、ダンサーがするやうに、右の足を浮かして、左の足を中心に圓を描いた。

總長は、ドアの抑へになつてゐる、テーブルに衝突しかけた。

「ほら、危い。」

かう云つた時には、總長の右の頸動脈の上へ、冷たい風のやうな、メスの刃が觸つてゐた。

二人とも、汗まみれになつてゐた。が、體は寧ろ涼しい位であつた。

テーブルの上へ、上體を凭せた總長の左側から、矢立がそこへ置かれた。

「早く！ 早く！ 早くしないと、あなたの立場が無くなる！」

一秒、二秒。

「では、個人の資格で。」

「どうぞ。」

「祕密は？」

「あなたが、お守り下さい。」

五分の後には、應接間は以前通りの位置に總てが歸つてゐた。

總長は、その故郷から彼の地位を頼つて來た村長に、満足を與へて送り出した。

村長は、帯から下一寸の羽織の衣紋を寛ろげ、山高帽を阿彌陀に浮かせて、人混みの中へ紛れ込んだ。

木蘇なごと云ふ人間が、此世にゐるなどと云ふ事を知つてゐるのは、彼の父母位だけであらう。

彼は打ち込まれた杖であつた。

永久に知られない、知られることを望まない、社會の「校正係」であつた。

——一九二六、六、二六——

刺された男

私は浴衣を着て、ブラリと家を出た。散歩である。

晩夏の野には、西瓜や、瓜や、陸稻や、黍や、芽を出した許りの大根や、農夫やが照りつける烈日の下で働いてゐた。

皆、生活に喘いでゐるやうに見えた。

林では、蟬が鳴いてゐたし、道の真ん中に蟻が大きな穴を掘つて、何かの蟲を運び込んでゐた。蜂が、蠅や、黄金蟲などと、飛び交つてゐた。

私は、散歩をしてゐたのであるから、どこへ行くと云ふ、當は無かつた。頭の中には、人生の散歩者と云ふ考へが、もう大分前から巢食つてゐた。

何と云ふ當もなく、當を拵へる必要もなく、人生をブラ／＼遊んで歩く、人生の散歩者の事を考へると、私は癩に障つてならなかつた。

『散歩どころかい!』と、私は散歩しながら思つてゐた。が、私の考へにも拘らず、私は浴衣を着て、骸骨のやうに骨ばかりになつた生垣に沿うて、田舎道を歩いてゐた。

茄子の畑で、十七八の百姓娘が茄子を摘んでゐた。私はそつちの方を見ながら歩いてゐた。と、いきなり、ブーンと私の懐に、何か蟲が飛び込んだ。

『畜生!』

私は、そいつを追ひ出してやろうと、胸を擴げると、長い毛の五六本、とんきような恰好に生えた奴が、私の乳の上を火のやうに刺した。

『あ、痛つ!』

私は、いきなり帯を解いて、蜂をはたき出した。が、もう蜂はゐなかつた。私に、初めから終ひまで、全で姿を見せないでゐて、蜂は、散歩者を刺した。

私は乳を抑へた。そして、茄子畑の娘の方を見た。

私が、あ痛つと怒鳴つたのと、すつかり裸になつて浴衣を振つてゐた恰好とを、娘に見られやしなかつたかと、思つたからであつた。

『刺しやつた!』

そして、私は乳を揉み揉み、野を見渡した。野には、私以外に、刺されねばなら

ぬやうなグウタラな恰好で、アラついてゐるものは一人もなかつた。

『蜂奴！ うまく螫したよ。』

私は、大声を上げて笑つた。

プロレタリアの乳

どこへ行かうか、彼等は思ひ迷つた。
 どこへ行くと云ふ當は無かつた。が、今居る處に止まつては居れなかつた。涼しさに、ほつとしてゐると、もういつの間にか、亜鉛屋根や窓硝子が、寒さうに顫へ出して、ガチ／＼と齒を噛み鳴し始めた。

汽車の笛が、解剖用のメスのやうに光るレールの上を傳つて、ズツと遠方から沁みて來るやうになつた。

彼は遅しい腕を持つてゐた。渡航用カバンのやうな分厚の胸を持つてゐた。頑強な體力から湧いて出る、勞働に對する渴望を持つてゐた。

放浪、旅、さすらひ、は美しい夢であつた。それは彼自身だけでの生活の間は、彼をどんなにか教育した。學校で學ぶ事の出來なかつた彼は、一本の木も草もない岩石の中に、鑿岩機を掘り進んだ。椰子の林の中を流れる洋々たる河に、デツキの錆を落しながら溯航した。八層樓の大建築の屋上で、一本のロープにブラ下りながら、大東京を（視察）した。それ等の生活は、力強く脈打つてゐる彼の心臓の内側

に、殺さなければ削り取る事の出來ない、信念を彫り込んだ。

彼の掘り進んだ山腹を流れる水は、四萬キロの發電所となつた。彼の打ち込んだ鋏は、一萬噸の汽船になつた。彼が尻鋏をし、型枠を外した八層樓には、幾百の會社が事務を取つた。彼が運び歸つた綿花では、數千萬の人たちが寒さを防いだ、それを彼は自ら教へた。それは人々に無くてはならぬものであつた。そして彼は、人々に無くてはならぬものを作るために、波打つ腕を振り、輔のやうに荒々しく、その大きな胸を呼吸することを望んで止まなかつた。

彼の仲間たちは、皆彼と同様に、その體中の筋肉と、その微細な頭腦の活動による貢獻とを、人々に與へたかつた。

彼等は生産し、與へ續けて來た。

けれども今は、彼等は去らねばならなかつた。

大小の煙突が、煙なく、寒く晩秋の風に吹き曝されてゐた。

彼等の工場は破産し、閉鎖されねばならなかつた。決して、人々にモスリンが行

き渡つてしまつたからではなかつた。彼の愛すべき一人の子供でさへ、未だモスリ
ンにありついてはゐなかつた。
實彈演習のための野砲隊のバラツクのやうに、工場は人氣がなかつた。昨日まで
残飯や下水を漁つてゐた鼠達も、數千の彼の仲間たちと、どこへか引き移らねばな
らなかつた。

そこには廢墟があつた。擬寶珠の除れたニコライの廢墟、揺れ落ち焼け崩れて、
鐵骨だけが残つた三越の廢墟、それは地震の生んだそれであつた。

が、これは、一二の重役か、爛れ切つた歡樂を追ふために、横領費消した結果な
のであつた。

總ての努力が盡された。忍従があつた。怖い忍苦であつた。その忍従が個人
で試みられたならば、アツシジのフランスのそれにも増したものであつた。彼等
は、老いたる母や、いたいけな子供たちをも、自分と共に飢ゑに堪へしめた。寝ね
ながら雨に打たれさせた。獅子の餌食となるため、演技場に追ひ込まれた、原始キ

リスト教徒たちにも似てゐた。

鬭争があつた。略奪に對する抗辯であつた。罪なくして餓死せしめられる事に對
する抗議であつた。

野を横切り、山を越え、川を涉つて、彼等は進んだ。パンを求めるために、彼等
は進んだ。が彼等の行く手には無数の、堅固な障礙物が設けられてゐる。そして、
濃い毒ガスが、彼等の目的物を視界から誤魔化してしまつた。

線路は續いてゐた。その鋭い光は、一直線にどこかの外國へでも續いてゐるので
はあるまいか、と思はれるほご、淋しく悠久な光を以て續いてゐた。

彼等親子三人は、晩秋の風に噛まれて淋しく立つてゐる、停車場の待合室にゐた。
彼等の外に、數百人が廣場に溢れてゐた。子供の泣く聲や、大人たちの罵り合ふ
聲やが、喧しく構内に響いた。が、その喧騒にも拘らず、群集の上には、秋の空の
やうに冷たく澄んだ涙しさが、蔽ひ被さつてゐた。

今、淵は退いてゐた。暗礁は頭を水面から上に出してゐた。けれども、もう直ぐ

に満潮が泡を噛みながら、暗礁を呑み込んでしまふ。彼らはその暗礁の上にあるのであつた。止つてはゐられなかつた。が、行く事も出来なかつた。

線路は、外國にまでも、國境を越えて續いてゐた。その線路には大きな都會、小さな村落が、繩の大小の結び目のやうに連なつてゐた。

たとひ、どのやうな陰氣な、打ち沈んだ、不景氣であらうとも、その無数の結び目のどこかには、彼等を容れる處がありはしないだらうか。よしんば、今まで彼等が結んでゐた、その小さい貧しい結び目が斷ち切られた場合であるにしても、その他の大きな結び目には彼等を容れ得る處がないだらうか。

晩秋の風は、霜の氣を明日に含んでゐた。冴えて高い晩秋の空は、雪の輝きを潜ませてゐた。總ては、自然の威嚇の前に、段々緊張し、閉ぢ籠り、凝り固る用意を怠らなかつた。養蟲は口を閉ぢた。百舌鳥は蛙や小蟲を木の枝に刺した。蜂は蜜を、蟻は倉庫にクリームを、冬中の用意に貯へ終つた。

だのに、彼等は、たとひ家があつたにしても、その屋根から追はれた。そして行

く處は、(どこへなりとも) 勝手であつた。

一九二〇年代から後の、プロレタリアの子供たちは、故郷を持つと云ふ事がなかつた。

彼等の故郷は疾走してゐる汽車の下の、一本の枕木でしかなかつた。

彼は、驛前の廣場や待合室に溢れてゐる、昨日までの「同志」を見た。

彼等と共に縣廳にも押し寄せた。山河を海嘯のやうに押し切つて、××××雪崩れ込んだ。

列車が入つた。

目に見えない絲で固く結びつけられてゐる、驛前の群集は、思ひ思ひに、各々の箱の中へ乗り込んだ。

——汽車が動き出せば、テープは切れるのだ。折角あそこまで訓練されて來た集團運動の組織は、たとひ失はれないまでも、一先づ打ち切れてしまふんだ。——

彼は、三つになる娘を膝の上であやしなから、窓の外を眺めた。群集は半分に減つてしまつた。古枕木の柵に凭れて、列車に淋しい目を送つてゐる、幾人かの同志があつた。

廣場前の大通りは、明日も明後日も、ポプラの並木が、寒さに顫へ續けるであらう。大通りの向うには、龜の甲のやうに、低い丘がズツと續いてゐた。丘には桑の木がブラシのやうに生えてゐた。

その丘の向うに河があつた。河に沿うて彼等の工場が建つてゐた。

彼等の工場であつた、その工場が彼等を搾り、彼等の仲間の幾百人かを、生きながら鰻のやうに引き裂きもした。そこで數多くの悲劇が生れ、死んだ。

一日も、一時間も早くそれから遁れたい、彼等の工場であつた。が、今では、そこは懐しい彼等の工場であつた。

汽車はプラットホームを離れた。

二つの驛で乗り換へた。

そして、今、汽車は一晝夜走つても紛れ道のない、大幹線を走りながら夜に入つた。

夜に入ると共に、急行に變つた。

強制移民、又は追放者である、渡航靴は、子供の牛乳を買つて來るのを忘れてゐた。

子供が、餘り泣くので、デツキへ出て揺りながら、それを思ひついた。

「駄目だよ。お前牛乳を買はなかつたんだらう。お腹が空いちやつたんだよ。」

彼は、女房へ子供を渡した。女房は子供に乳房を與へた。が、それは乳房を與へただけで、乳を與へはしなかつた。

乳房から乳が出ない結果、子供はやけになつて泣き喚いた。

同乗客は擧めつ面をした。

「あんなに子供を泣かすなんて。」と小聲で非難したおかみさんもあつた。

「うるせえなあ。」と、眠りを覺された男が呟いた。

彼は同乗客の迷惑を感じた。よしんば同乗客の迷惑がないにしても、自分の子供を乳のないことのために、そんなにも扱られるやうに泣かせたくはなかつた。

彼は子供に對する表しやうのない深い憐みに捕はれた。乳を買ふ事を忘れるなんて、彼は自分たち夫婦の粗忽さを後悔した。彼は後悔して、自分自身を責めつけて、車掌室へ子供を抱いて行つた。デツキへ出た、だが、それでも子供は泣き続けた。

彼の深い憐れみにも拘らず、子供は益々喚き続けた。足をバタンバタンさせて狂ひ泣いた。憐れみでは、腹が膨れないことは勿論であつた。

「あつちに行つて、下さい。」

乗務車掌が云つた。

「はい、あのう、此次に止る驛までこの位時間がかゝりますか？」

「えゝつと、未だ二時間と十七分かゝりますね。」

車掌は、大福餅位の懐中時計から、時間を引つ張り出した。

どうもありがたう、と云ふべきである事も何も、彼は思ひ浮ばなかつた。二時間と十七分！ その間、子供は泣き続けるんだ。もがき続けるんだ。小さな、軟い體を自分自身で消化しなければならぬんだ。

思はず、彼の雙の腕に力が籠つた。急にスピツチでも入れたやうに、子供の叫喚は新に高まつた。彼自身も子供と歩調を合せて喚きたくなつた。足をドタバタさせたかつた。

疾走してゐる汽車が呪はしかつた。いつそ突如！ 轉覆して乗客全部が、忌々しい、苦しい、餓しい、寒い、此世の中から綺麗薩張りとお別れしたらいいのに、と思はずにはゐられなかつた。でも、まだ走り方が足りなかつた。遅すぎた。速く速く、飛んで行け。子供を引つかゝへた彼は、遊動圓木に撥みでもつけるやうに、身を前後に揺ぶつた。二十本の導火線に火をつけ終つて、堀鑿から這ひ上らねばならない、馴れない坑夫の焦燥で、彼の頭の中は渦巻いた。

今までも、屢々あつた事ではあつたが、彼は、「何だつて子供なんぞ産んだんだ

らう」と云ふ考に打つ衝いた。が、それはアルコールガス爆發のやうに、瞬間的のものであつた。一つ考へに長く留つてはゐられなかつた。後から後から、解決しなければならぬ。が、どうしても解決することの出来ない問題が、嘔吐のやうに湧いて來るのであつた。

子供は抱かれたまゝ、足をドタ／＼させ續けた。その軟い眼の縁には、可哀相な三十女に見るやうな、薄暗い隈が生じた。その上に用心深さうな、遠慮した眼が半分開いてゐて、睫毛が疎まばらにハツキリと下眼蓋の方に蔽ひかぶさつてゐた。渴いた喉のやうに眼からは涙の影も光らなかつたが、餓と渴きが燃えてゐた。もう、子供子供した乳の匂ひも、その頬に匂はなかつた。

小さな悪魔のやうに、泣き喚いた。

彼の心のやうに夜は暗かつた。何のためにか彼の氣持は、列車と同じく驀進したが、汽車は當てがあつたが、彼は何のために急ぐのか、自分でも分らなかつた。

三つになる娘の胃の腑は、熱のある唇のやうに乾いてゐるに違ひないことを、彼

は知つてゐた。餓じいであらう。渴くであらう。それは分つてゐる。だが、そんなにやけになつて泣かなくても、そんなに責めるやうに喚かなくてもいゝではないか。

——云ふまでもなく、父や母の手ばかりであつた。手ばかり位では濟まないかも知れない。いや全くそんな事ではない。これがたゞ腹が空いたゞけの事だからいゝけれど、もし疫痢でもあつたらどうだらう？ 二時間と十七分の間には完全に、手遅れになつてしまつてゐる。見す／＼死んで行くのを。藻搔き死にゝ、終ひには藻搔くことも出来なくなつて死んで行くのを、黙つて見てゐることになるんだ。——彼は、泣き叫ぶ子供の顔の上に、胴中を締められでもしたやうに、ポトリと涙を落した。

——たゞ、腹が空いたゞけだから、いゝけれど、と俺は思つた。病氣でないからいゝと思つた。病氣でもないのに、丈夫でピン／＼してゐて、大きくなるために營養を欲しがつてゐるのに、「たゞ腹が空いたゞけの事だからいゝ」と、俺はたとひ一

分間でも考へた。なほ悪いではないか。なほ悪い。俺が餓じがつて育つて來たやうに、此子を餓じがらせて育て、良いと云ふ法はない。それは解つてゐる。それは解つてゐる。だが、どうすればいいのだ。――

汽車は大小の結び目を、ひつたくるやうに手繰つて進んだ。

泣き勞れたのか、ひもじさの餘り心身が消耗したのか、哀れな小さな顔に、陰氣な、淋しい表情を固定させたまゝ、小さな生物は眠りに落ちた。その眠りの間を、發作が二分毎位に起つて、痙攣に似た泣聲を揚げさせた。

彼は、娘をそのまゝ年老いさせたやうな女房に抱かせた。

そして、ホツとして車室を見廻した。同乗客に濟まない氣がした。と、一方では無理やりに、彼等數百の勞働者を、例外なしに『たゞ腹が空いたゞけの事』の方に追ひ込んだ、牛脂の固まりのやうな、重役の幻像を睨みつけた。そのフェットの固まりが自分の形になつて、娘の眼に映る！

――俺は子供を飢ゑさせた。――

數ヶ月に亙る窮乏と、奮闘と、緊張とに加へて、列車の動揺と人いきれで、意識にかゝり初めた霧が、再び子供の飢ゑと云ふ風で吹き拂はれた。

――さうだ！ 食堂車があつた――！

彼は座席の横に置いてあつた、今は飲み盡して空になつた、(水瓶ビール瓶)を取り上げると、上着の下に隠しもしないで、張子の重役の首でも提げるやうな手つきで引つ摺んだまゝ、車室を突き進んだ。

一緒に乗り込んだ彼の仲間たちも、二つの乗換の間に、振り落されでもしたやうに、數が減つてゐた。

昨日までは、同じ目的を抱いて、手を取つて進んで來た仲間ではあつたが、今では、彼等の共同の目的は、血の氣の通はない一つの抽象に變つてゐた。

新らしい、出來たての一錢銅貨を牛脂で揚げた、そつくりの、彼等の支配人は、今は彼等から姿を隠してしまつた。その呪ふべき、彼等の貯金までも吸ひ盡した、生きた人間は、高い塀の中の植込みに圍まれた、幽邃な座敷に入つてしまつた。そ

して、その塀際には、請願巡查が『あどけない顔』をして草を撈つてゐた。しよつちう、揚げたての一錢銅貨の實在に對して、生きた反抗を持つてゐるやうに育つて來た彼等は、その對照が隠れると、どこにでも、時には仲間に對してさへ、心の中の煙を吐きつけ勝になるものである。

が、今は渡航靴の事について語つてゐるのだ。

彼は食堂車に入らうとした。けれども、もう時間が過ぎてゐたので、食堂車の扉は閉ざされてゐた。

不思議な事には、その扉が開かないことを知ると同時に、撥かれてもしたやうに、彼は元來の方へと、駈け出した。

——ちよつとの間でも、若し俺のゐない間に、線路の中に娘ごと飛び込みはしなかつたか！——

と、彼は感じたからであつた。

——馬鹿な！——

と、彼は、その馬鹿氣た感じに自分自身で嘲笑し、水を打つかげながらも、通路にはみ出した足を踏んづけ、頭を腕でこづきながら飛んでゐた。

何だつて、そんな不自然な、あり得べからざる豫感が彼を襲つたのであるか。それは全く唐突な、理由のない豫感でなかつたか。寧ろそれは狂的でさへもあつた。

けれども、彼はその狂的な感じを幾度、實際の出來事として經驗しなければならなかつたか。又は、何等の豫感もなく、極めて平氣で暢氣でゐた間に、そんなに怖い事柄が彼を待伏せしてゐたか。

それ等の怖い出來事について、彼が、その原因であり得た事は、殆んど無かつた。種は蒔かれないうで、出し抜けに生えた。子供が荷馬車の轍の下に這ひ込んでしまつた。そして、ぐちやぐちになつて拾ひ集められた。

彼は漸く骨を折つて育て上げた、五つになつた男の子を、『馬車の下に這ひ込め』なんて吩咐けて出た事はなかつた。それなのに、晩酌の一合に、子供の寝顔を見る事が出来るのを楽しみに歸つて見ると、女房もゐないのに、子供だけは、屑桶に捨

てられた魚の『あら』見たいになつてゐる！ 歸つて來た半狂亂の女房を殴りつけて、も一度薪雜棒で殴り足さうとすると、近所の人から、『おかみさんが、向ひの家に酒買ひに行つてる間に、坊やが、荷馬車の後輪に潛り込んだのだ。』と云はれた。

『それでお前さんを、工場に迎ひに行つたのだが行き違ひになつた』のであつた。彼は振り上げた薪雜棒を、そのまま子供でも抱くやうに、ひしと抱きかゝへて、ポロ／＼涙を流した事があつた。

そんな時でも、『日が暮れやがる』のであつた。會社の原料を積んだ荷車であつても、何でもかでも、休めば『給料』は取れないのであつた。

も一人の子供は、七つになつてゐたが、彼が工場から歸つて、頬ずりをしてやるとすぐ痙攣を起した。痙攣が濟むと、もう死んでゐた。

『俺にや小供は育たねえ。』

と、思ひ込んでゐたのであつた。そのたゞ一人の殘された子供が、ピン／＼して

ゐるのに、『腹が空つた』ために、死ぬほど泣き喚いてゐるのであつた。そして、泣き勞れた擧句、死ぬ時のやうに、時々、發作的な泣聲を揚げるのであつた。

『今度子供を殺したら、手前も一緒に殺しちやうぞ！』

彼は、女房を十分に嚇し込んでおいた。

——だから、だから——

彼は、追つかけられる梨盜坊のやうに、フツ飛んだ。そんな眞夜中に、町中の盜坊なら兎に角、列車の中を駈けると云ふ法はなかつた。蹴飛ばされたり、突き當られたりした乗客達は、もう一晚中眠られないほど、愕かされてしまつた。そしてぶつ／＼泣いたり、怒鳴りつけたりした。

勿論、これらの悲惨な出來事が、渡航鞆だけを待つてゐたのではなかつた。渡航鞆よりも、もつと／＼慘めな目に待ち伏せされてゐた仲間もあつた。

それは避けられない事であつた。何故かなら、此時代では總ての勞働者たちが、必要な時に×××××仕組の上を歩いてゐる、豚以外ではなかつたからだ。多くの

工業労働者や農民のうち、一體どれだけの数が、職業病に命を取られないで天壽を完うし得たであらうか。又、その子供たちは、どの位多く若芽の時代に熱湯を打つけられたか。

渡航靴は、さう云ふ状態で列車の最後部まで駆けつけた。

女房は子供を抱いて、ユラ／＼してゐた。列車の震動と、長い間の疲れと、營養不足と、恐らく物心ついて以來、決して十分眠らなかつた處の睡眠不足とで、陽炎のやうにユラ／＼してゐた。

彼は、取り敢へず安心した。悲劇は起つてゐなかつたからだつた。だが、悲劇は起つてゐなかつたのだらうか。四五年前別れた、一人の同志がN市にゐる事を、停車場の待合室で思ひ出し、そこへ行く事にした事は、安全確實な企であつたらうか？

その頼つて行く同志は、蒸溜水のやうに純粹な、おまけに提灯見たいな穩かな男

であつた。その男を愕かす事は、どんなに骨を折つても出来なかつた。彼は蓮のやうに泥の中に根を下してゐた。だが同様に、生活は蓮の葉のやうに水面に危く泛んでゐるのであつた。

防波堤の隅や、石垣の隅や、岩壁の凹んだ部分などに、木屑や、野菜の切れつ端や、その他のあらゆる屑が、波のまゝに吹き寄せられる。勢よくモーターボートやランチが走り過ぎると、塵埃の浮島は一度に壊れてバラ／＼になる。中にはバラバラになつた／＼めに沈んで行く切れつ端もある。

その藻屑の運命にも似た、渡航靴であり、女房であり、提灯ではなかつたか。

彼は、女房と並んで腰を下した。

「少しは眠るかい？」

と訊ねようとした時、呻るやうに泣き出した。その聲は、自分の小娘の泣聲とは思へなかつた。單純な泣聲ではなかつた。嚙まれて死に瀕した犬が、微に上げ得る最期の嘆きに似てゐた。未だ三つにしかならないのに、路傍に行き倒れた老人の、

喉を鳴すのと同じ響きが、その泣聲に血を混ぜた。
 彼は再び、反射的に立ち上つた。
 「死ぬのではあるまいか？ 病氣ではなしに、餓死に、死ぬのではあるまいか？」
 じり／＼と腹を焼かれ、喉を締め上げられて、これから燃え上らうとする若い命を、風を與へないで消して終ふやうな、そんな残酷な眼に合はせる！ 生きてまゝ蛇の腹の中で死ぬ蛙、その同じ苦しみを今、彼のいたいけな小娘は味つてゐるのであつた。

それを彼は又、「ちつとして見て居」なければならぬのであつた。「ちつとして見てゐられる事」ではなかつた。けれども、彼にはどうする事が出来よう、若しそれが可能でさへあるならば、彼は娘の食ふために、彼の指さへ與へたかも知れない。彼は胼胝だらけの掌を眺めた。その眼を子供に移す時には、子供の顔は、濃霧の向うに僅に見える小島のやうに霞んでゐた。

若し、此小娘が、二時間と十七分を待ち切れないで、今此處で、藻掻き死に、狂

ひ死に、死んだとしたらどうであらう？ 種々な慰さめや、哀悼の言葉や、もう役にも立たぬミルクの贈物などが、乾いた畑に灑ぐ雨のやうに降りかゝるだらう。それよりも「乳も持たずに乗り込んだ」無謀の父母を責めるであらう。「せめて、ピスケットやウエーファー位でも持つて乗るのが、親の勤めだ」と、云ふであらう。誰が渡航靴や女房の心臓の中から、親としての考への餘裕を引き摺り出したか！ 又はそれ程逞しい體軀で働き続けた、渡航靴の中味を奪ひ去つたか！ 堪へ難い焦燥は、渡航靴の體を落ち着かせては置かなかつた。ヒク／＼と、彼はつゝかれたやうに體を顫はせた。悲しみと、憐愍と、憤りとの三つのプロペラーが、素晴らしい速さで回轉した。

「今、俺たちをこんな目に會はせた重役達は、絹夜具にくるまつて、暖く寝てゐるんだ。俺達八百と、その家族二千人とを、餓死の境に叩き込んでおいて、奴等は消化劑と睡眠劑で眠つてゐるんだ。奴等の子供たちは、一人づつ、理想的な乳を持つた乳母に抱かれてゐるんだ。畜生！」

彼は心の中で燃え上る焔と火華で、躍り上らうとする足を、立つことによつて抑へつけた。

だが、『今は憤つて計りある時でない』ことを彼は知つてゐた。『いゝ醫者はどんな時でも、冷靜さを失はない。今は、子供に乳をやらねばならない時だ。』

が、彼はどうして、それを手に入れゝばいゝのか。
彼は、半分夢中で、車掌室へ入つた。そして、その腰かけに自分の體を投げつけた。

車掌は、硝子扉を越して客室を見た。客室は混んではゐなかつた。

『向うに行つてゝ呉れませんか。』

車掌が云つた。

『えゝ。』

彼は又、つゝかれたやうに立ち上つた。

110 『もう、どの位すると次の驛につきますか？』

彼は、ボンヤリ車掌の顔を見ながら訊いた。

『あと、一時間と四十分ですね。だが、どこか工合でも悪いんですか？』

『えゝ。』

彼は何氣なくさう云つた。が、ふとわれに歸つて云つた。

『私ぢやないんですが、子供に乳を忘れて來たので、子供がひどく飢じいのです。』

『あ、さうですか。ぢやあ、別段次の驛まで待たなくても食堂車で買つたらいゝでせう。』

『えゝ、行つて見たんですがね、もう寝てゐるんですよ。』

『起きませんか？』

『起きなかつたですよ。』

『ぢやあ、私が起して見ませう。』

車掌は直ぐに立つて、氣輕な歩調で先に立つた。

渡航靴の廣い胸の中は、感謝の念が入り切れなくて、眼にまでも溢れ出さうにな

つた。

子供の前を通る時、彼は女房に云つた。

「車掌さんが食堂を起して下さるさうだから、大抵乳が手に入るだらうと思ふよ。」
さうして子供の頭を撫でた。

「あゝ、此お子さんですか。さつき泣いてましたね。腹が空いたんぢや堪りませんよ。可哀相にね。」

車掌も、子供の頭を撫でた。

女房は車掌に、泣くやうな顔で笑つて見せた。

全身が飢ゑたゝめに火傷した子供は頭を撫でられて、再び切るやうに叫びを上げた。

食堂車の扉は、譯なく開いた。それは彼が慌て過ぎてゐたから、通路の扉でなく
コック部屋の扉を開かうとしたから、開かなかつたのであつた。

「ねえ、君、君、ねえ、ボーイさん。」

車掌はテーブルの上に長くなつて、寝てゐるボーイを揺り起した。

ボーイは、夢の中の人間でも見るやうに眼を開いた。

「牛乳はありませんか？」

車掌が云つた。

「時間外ですから。」

ボーイは、夢の續きのやうに呟いた。

「どうするんですか？」

向う側に寝てゐた、コックが眼を覺して訊いた。

「赤ん坊が飢ゑてゐるものですから、時間外だとは思ひましたけれど、車掌さんに
起して頂いて、濟みませんが、少し分けて頂けないでせうか。」

渡航靴がコックに云つた。

「あゝ、あなたの子供さんですかい。」

コックは、彼の見窄らしい風を見るといきなりテーブルから跳び下りた。そして、コック部屋へ入つて行つた。

コックは、サイダーの空瓶に入つてゐる牛乳を棚から下しながら、思つた。「車掌なんぞ頼みやがつて、小生意氣な野郎だつたら、百圓出したつて、一滴だつてやりやしないんだが、あれぢや、車掌まで見兼ねて連れて來たんだよ。きつと。えゝつと、これだけつか無いんだが、やつちやうと、朝コーヒーに入れるのが無くなつちやうぞ。えゝつ、コーヒーに乳が入らなくなつて、飢ゑやしないや。やつちやえ、やつちやえ。」

コックはもう夜が明けでもしたやうな、晴れ晴れしい顔で、サイダー瓶をブラ下げて出て來た。

「これだけつかありませんよ。コーヒーに入れるだけのやつですからね。だから、マア、これだけでゝも、一時を凌いどいて下さいな。驛に着きや、又取つといて上げますからね。」

「どうも、ありがたう御座いました。これで小供が助かりました。御禮の申し上げやうもありません。」

渡航靴が云つた。

「どうも有りがたう。叩き起して濟みません。」

車掌が云つた。

「いゝえ、なあにお互様ですよ。貧乏人はお互でさ。」

「で、お金はいくら上げればいゝでせうか？」

渡航靴が訊ねた。

「お金？ 要りませんとも。百圓持つて來たつて、腹の膨れた白い手にや賣りませんよ。『時間外』でさ。仲間にや取引ぢやありませんや。ハ、ハ、ハ。若しあるんだつたら、や、どうも失禮、又、何かお子さんに菓子でも買つてやつてお呉んなさいな。」

通り雨のやうに、渡航靴の眼から涙が落ちた。がそれは晴れ晴れしい涙であつ

印度の靴

た。

—一九二六、二〇、二七一—

印度人ミスター、ラム・サラツプは、デツキパセンヂャーとしてカルカッタから上海まで、日本郵船會社S丸に身を託した。

S丸甲板部の水夫見習、羽生民夫は、沈没するのに大して手間も取るまいほど年を取つてゐて、錆びてしまつたS丸が、年増の妾が藝者に逆戻りするやうに、も一度客を乗せると云ふ事に此上もない喜を感じた。

「幾人位乗るんだね？」

羽生民夫は、デツキに（どう云ふ風に作れば吹き飛ばされないか）骨折りながらデツキパセンヂャー用の便所を拵へてゐる。カムネ（カーペンター・船大工の訛）に聞いた。

「五百人位だらうよ」

——五百人！ 犬だつたら五百位は載れるだらうよ。が人間では、チエツ、又からかつてやがるんだ——

「五百人なんて、乗れる譯がねえぢやねえか。」

羽生は眩くやうに云つた。うつかり何か取り落したやうな調子であつた。

「乗れる譯がねえつて！ 馬鹿野郎！ 俺だつてさう思はあ、五百人もゴタ／＼乗り込んで見ろ。頭か尻尾を踏んづけなけや、歩けやしねえや。だが、會社ぢや儲かるんだからな。へッ、暴化でも來て見ろ、どんなものだか。御難だぜ」

大工が便所を造り、水夫がデツキ一面に、日蔽をかけた。

そして、どや／＼と乗り込んで來た、デツキパセンヂャーは小さな風呂敷包みをブラ下げたまゝ、どこへ潛り込むかに銘々あつけに取られてゐた。

ミスター、ラム・サラツプは、後部甲板のハツチの上に、小さな水甕と、その風呂敷包みとを置いた。

デツキパセンヂャーは、支那人、印度人などの無産者であつて、多くは移民であつた。支那人は、鐵デツキにぢかに寝轉んで阿片を吸つた。印度人は、素焼の水甕で上手にお茶を出した。

罐に入つたまゝ、いゝ色に淺草海苔が焼けるだらうほど、太陽は汽船を一掴みに

した。そこでは、昇る太陽は呪はしい悪魔のやうに思はれた。その太陽を、印度人たちは、立つたり、長く寝たりしながら、恐しく手間のかゝるやり方で三拜九拜した。

「そんなに暑く照りつけないで下さい。」

と印度人たちが、揃つて頼んでゐるやうであつた。

日が沈む時も、禮拜は行はれた。

「あなたが、餘りひどくしなかつたお蔭で私たちは助かりました。」

と、彼等は揃つて感謝してゐるやうであつた。

印度人の體格は、見事なものであつた。そんなに見事な偉大な體軀の上に、氣の弱さうな、おとなしい一方のくたびれ切つた顔が載つかつてゐた。

セーラーや、火夫たちは、彼等がお客様であるにも拘らず、「戰勝國民の誇」を以て、彼等の頭や尻尾を通路で踏んづけた。

羽生は、「踏みつけるのは、餘りにひどい」と思つた。

何故かなら、彼等は、おとなしい、深切な人種であつた。

ラム・サラツプの如きは羽生を見る毎に、お茶を飲めと云つて、小さな甕を差し出した。

What's your name ?

と、片言でラム・サラツプが、羽生に聞くのであつた。

Me name Hau

と、羽生は答へるのであつた。

How! How! How? what's the mean ?

と、ラム・サラツプが驚いて訊ねた。

Me name is Hau.

羽生は、これも驚いて、いつまでもハウ、ハウ、ハウ、と繰り返してへした。

二人の言葉は、それ以上餘り深くは通じなかつた。

羽生は、眼を瞑つて、思ひ切つてお茶を飲み乾した。

お茶は臭くはなかつた。それ處か、非常に香りがよくて美味かつた。
 羽生は、片栗粉でも混ぜたのではあるまいかと思はれるほど、どろ／＼した、青い海を眺めながら考へた。

(こいつ等が、お茶を飲む甕で、尻を洗ふつてのは、たゞの悪口ぢやあるまいか？でも些も臭くねえや。それに何もくつゝいてやしねえしな。右の手は尻を洗ふため、左の手は食ふための用、と云ふのは、嘘に違ひない。でなきやこんなに香りがよくてうまい筈がない。)

ラム・サラップは、二つの掌で拵へた、メリケン粉の丸板にカレーを挟んだ食料を、羽生に食へと云つた。

それは、云はゞ、それだけの量のものが食道を通つて、胃の腑へ入つて行く、と云つた風な食物であつた、羽生に云はせれば、それは氣休めの食物であつた。(だからこれ等は、たきつけのやうに瘠せてゐる)のであつた。

羽生は、水夫達の食ひ残しの、ライスカレーをバケツに半分ほど取つて置いて、

それをだるさうな夕闇がノロ／＼、海の上に這ひ廻る時分に、後部甲板に持つて行つた。

彼は、ラム・サラップと、その仲間たちに怒られはしないかと、ビク／＼しながら「やり度い」と申し出た。

半杯のバケツの中のライスカレーは、怒られる處か、異常な感謝の反響を呼び起した。

ラム・サラップは、ボーイ長羽生と知り合ひである。と云ふ事で、彼等の間に大きな信用をさへ贏ち得た。

羽生が、澤庵を四五本ブラ下げて、又は骨付きの牛肉の一固まりを抱へて、上着とパンツとの間に、臍の上下一寸位の環状の皮膚を剥き出しにして、倉庫からおもてのコック部屋に通ふ、珍妙な、たとへば、零落したロビンソン・クルーソーのやうな姿は、デッキバセンチャーには、渴仰の的に見えた。

彼等は、羽生を呼んだ。が、何故、彼がハウであるかは誰も知らなかつた。ラム・サラツプは、羽生に、錆びた刃の一枚ついた、安全剃刀を呉れた。羽生は、それを貰つて、頬に當て、剃る眞似をして見せた。ラム・サラツプは、非常に慌て、首を横に振つた。羽生が呆氣にとられてガンヂーに似たラム・サラツプの顔を眺めてゐると、ラム・サラツプは、大きな聲で笑ひ出した。その笑ひ聲はライオンや虎などと森林の中で、一緒に戯れるやうな、朗かな、原始的な笑であつた。

Then,

羽生は、さう云つて、頭に持つて行つて見せた。

ラム・サラツプは、笑ひを止めた。その顔には困り切つた表情が浮んだ。(ぢや、何だ、〇〇でも剃るんだ、この人たちの宗教的な儀例でももあるんだらう。)

羽生は、苦笑して、それをポケットに入れた。ラム・サラツプは安心したやうに微

笑んだ。

支那人は暗い石炭庫に陣取つてゐた。そこにも、デツキにも入り切れない者は、船尾のダンブルに蠢いてゐた。そして阿片を吸ふか、賭博をやるかしてゐた。

羽生は、一日の締めつけられるやうな労働と、油でも揚げられるやうな暑熱とから、又、蒸されるやうな、水夫室に眠るために入る時に、水夫室の三尺幅の通路に練でも積み重ねたやうな、デツキバセンチャイを、踏みつけないでは通る專が出來なかつた。

「駄目だ、こんな處に寝ちやあ。」

と、彼は日本語で怒鳴つた。が、彼等は錆びた鐵デツキに、溶けて流れついた、コイルター見たいに、眠りこけてゐて、足位踏まれても起きようとはしなかつた。

——何故、こいつ等は起きようとしなないんだ。何故こいつ等は、この巖乗な腕を振はうとしないんだ。こんなにも澤山追ひ出されて行くんぢやないか。何故捕つて起たないんだ。直ぐにも掴めるのに、何故掴まうとしないんだ。」

羽生は、だるくて、殆んど感覚を失つた足で、入口を跨ぎながら、振りかへつて見た。
 (だが、印度人や、支那人を罵る譯には行かない。俺たちはどうだ、俺たちは何故起たないんだ、何故、こんな強い腕を仲間同志の喧嘩だけに振つてゐるんだ。)
 彼は、齒齧みをして、そんなものにも慰さめられる事の出来ない、憤怒に囚はれた。

プロレタリア同志の、世界的な感情の交通や生活態度の共通やが、彼を慰さめる時であつた、が、その多くの人たち、地球上に有り餘る程の多い仲間、自滅を餘儀なくされてゐる多くの仲間たち、それが、何にも爲ないで、クヨクヨしながら、殺されて行く。何と云ふだらしのなさだ！ 彼は、憎悪を以てデツキの上の鯨共を、睨めなければゐられなかつた。だがそれならば、今、彼が歸つて行かうとしてゐる彼の故國はどうであつたか。そこでは、一人残らずのプロレタリアが眼を覺して、その巨腕に力瘤を入れ初めたか？ 又は此汚ならしいデツキバセンヂヤイを、嫌悪

と焦燥とでじりじりしながら眺めやる發作を起す、彼自身及び同乗の下級海員はど
 うであつたか。

それ等の事を考へる時、彼の胸の中から、體に入れ切れない程の、大きな腫物が、見る間に太るやうに、彼を息詰らせるのであつた。

海は凩いでゐた。ぬる／＼してゐる肥えた南瓜の葉のやうに、厚みのある青さであつた。

左舷に陽が沈みかけてゐた。

水夫たちが、デツキに整列してゐた。

船長と船醫とが何か云つた。

二本の櫂の棒の一端が、水夫によつて持ち上げられた。その上の白木の箱が、スル／＼と迂り初めた。そして、直ぐに海の中へドブンと落つこちた。

落ちると直ぐ、その箱の波紋は、船尾の方に流れて、やがてスクルーの搔き廻した、踊る砂のやうな泡の中に消えてしまつた。

又、次の白木の箱が亡つた。その波紋もすぐに消えて、船の残した足跡だけが、煙と共に長く残つた。

その白木の箱の中には、船尾のダンブルで死んだ、二人の支那人が入つてゐた。彼等については、仲間の支那人さへも何も知らなかつた。

棺には、錆鐵が重りにつけてあつた。だから、ブカ／＼浮いて歩くことはなかつた。

棺の沈んだと思はれる邊に、冗談見たいにまん丸い團子のやうな雲が一つ浮いてゐた。日が沈むにつれて、雲が七面鳥のやうに憤つたり、恥しがつたり、嘆いたりした。

陽が落ちて暗くなつた。

水夫たちの食事が済んで了ふと、羽生は、船首につゝ立つて、海面を眺めた。

(俺は、日本を抜け出さうと思つて、船に乗つたんだが、今、もう歸りかけてゐる) 彼は海面を見詰めながら、一人で考へに耽つてゐた。

畫に書いたやうに、小魚が、船に追はれて追ひつかれさうになるとバツ／＼と、傍へ逃げた。飛の魚は、切羽詰ると思ひ切つて二十間も先へ風を切つて飛んだ。

(俺は、一生涯歸らない積りで来たんぢやないか。それに、脱船しようと試みもしないで、グズ／＼に歸航してゐる。だが、搾るか、搾られるか、どちらかより外に俺の着いた處ぢや外に道が無かつた。それにどうだい、セーラー達は？ どのいつもこいつもボースンの鼻息を、うかゞつてやがる！ いゝ加減搾られた上、月二割で又搾られてやがる。ヘツ、さう云ふ俺は無月給で搾られてやがる。)

印度洋は暑かつた。支那海は涼しかつた。日本海は寒かつた。けれども、どこも、息は詰るのであつた。寢臺は足が悶へた。頭が悶へた。まるで、彼が行く先々へ、ペト／＼した息苦しいガスが追つかけて来るやうに思はれた。

(あれ等は、殺されたんぢやないのか。病氣で死んだのか。阿片で參つちまつたのか。だから、みんな知らない顔をしてゐるんだ。ヘツ明日も又、二つ位死骸が身投げするだらうよ。)

羽生は、不思議に思つた。彼は自分が暢氣さうに、水夫見習などしてゐる事が、自分でも不思議であつた。

(外の奴が暢氣さうに黙つて死んだり、生きてまゝ腐つたりするのを、俺は憤慨してゐる。だが、その外の奴が、俺を見たらどうだ。俺は暢氣さうに、白ばつくて水夫見習なんか爲てゐる。俺の母は自殺した、妻はふツ飛んだ、だんほゝの花見たいにどこかへ消えてしまつた。子供たちは病死した。その原因は何だ？ 皆、皆、飢からではなかつたか。それほど俺は引つぱたかれても、未だ眠つてゐるぢやないか。他人の事が云へるか。だが、俺は初めたいんだ、ちつとしてゐられないんだ。だが、それは一人では出来ない事なんだ。畜生！ 手前たちや、癪にや障らねえのか！)

彼は、いきなり足で、デッキを蹴つた。それは、餘り夢中に、餘り力を入れすぎたために殆んど彼を昏倒させる程、頭に響いた。フォックスル(船主縷)の下ではセーラーたちは、暑中のキヤラメルのやうにグニャ／＼になつて、眠りこけてゐた。

闇と明りとの入れ交る、夕暮は忌々しい時間であつた。眠らねば、明日の未明からの労働に、鐵の鎧を着たやうに重い體で打つ衝らねばならなかつた。眠るには暑過ぎた。しかし(眠い)とこは、どんな暑さにも拘らずセーラーたちを攻めつけた。ウイスキーの空瓶を利用した水瓶は、一夜の中に無我無中に二本も空けられた。その水は湯のやうにぬるんでゐた。死んだやうな眠りであつた。が、暑さと闘ふために浅い眠りであつた。

羽生は、そんな晝と夜を、譯も無く送り迎へる事に堪へられなかつた。

(何か、目的があるのか？ その目的は、確に掴み得る事なのか？ 氣休めではないのか？ 船に目的があるやうに、だが、船は着いた處から、又出發するんだ、沈没するか廢船になるまでは絶えず引き摺り廻されるのだ。俺はそれでいゝのか？)

青い海は、黒く暮れた。

船首の嚙み砕く泡だけが、山間を流れる小河の飛沫のやうに、チラ／＼白く見え

羽生は、船首を離れた。タラップを降りて船尾のハッチへ行つた。

「ラム・サラップ。」

「ハウ。」

ラム・サラップは、禪僧がするやうに、ハッチの上に端坐してゐた。

羽生は、デリックに背を凭せて、上からラム・サラップを見下しながら、云つた。

「君はどこへ行く？」

「アメリカへ」

「フーム、アメリカへ？ 何を爲に？」

「哲學を研究しに。」

「哲學を？ さうしてどうするんだ？」

「フィラデルヒヤ大學の哲學科に、入る積りだ。」

「いや、何のために哲學を研究するんだ、と聞いてるんだ」

「何のために？ それは未だ分らない。多分哲學がそれを教へてくれるだらう。」

「哲學を研究しなければ、何を爲て良いか何を爲なければならぬか、君には分らないかい。」

「さうだよ。何故人間が苦しむのか、何故人間が平等でないか、その答へが解らないんだ。それは、哲學が答へて呉れるだらう。」

「フィラデルヒヤの大學には、その答へが置いてあるのかい？」

「それは知らないよ。」

「人間が苦しむのは貧乏だからだ。搾られるからだ。搾る側になりさへすれば、その人間には變つた世界が在る、と云ふ事が君には分つてゐるんだらう。勳章を取るやうに、肩書を取るために、フィラデルヒヤに行くのとは、違ふかい？」

「印度では、搾つてゐると思はれてゐる、階級の人でも、幸福ではないよ。」

「その人も搾られてはゐないかい？」

「さうでもないよ。」

「君は貧乏かい？」

「僕は貴族だよ。だけども富豪ではないんだ。」
 ラム・サラツプはさう云つて、風呂敷包みを解いた、そして、一足の靴を出した。
 「この靴は、貴族以外には履けないんだよ。見て御覽、尖が渦を巻いて、甲の方に密着いてゐるだらう。そこは金色だらう。これは貴族以外には履いてならない、事になつてゐるのだよ。」

羽生は、靴を手に取つて眺めた。

「ちや、何故君は此靴を履かないんだ？」

「普段は裸足の方が樂だよ。」

「ちや、アメリカで履く積りかい？」

「いや。」

「ちや、どこで履くんだね？」

「もう、實用には立たないんだよ。」

「ふうむ、では何だね。今まで此黄金色の貴族靴で民衆を履みつけて来た、と云ふ

尊い記念なんだね。」

「君は皮肉屋だよ。僕は、たゞ持つて来ただけなのだよ。」

「靴にまで、印度では差別があるのかい？」

「日本では無いかね？」

「うん、日本では……」

羽生は、ハツとした。日本では、靴にまで差別がないだらうか！ 神主だけが、祭の時に履くおそろしく不便な靴。自動車から大理石の玄關まで、玄關から舞踏室、それ等を目的として作られた靴、その靴の履みつける絨毯は、彼の本國では無かつたか！

「日本では、矢つ張り、あるにはあるよ。」

「あるだらう、どんな形だね。」

「それは見た事がないよ。俺たちの足には合はねえんだ、頭の上にあるんだ。」

羽生は、片方の足で、コッコツと、ハツチを踏んだ。

「ハツハツハ。そんなのぢやないだらう。」

羽生は、自分の靴を見た。

彼の靴は、右足にでも左足にでも履けるやうに出来た、木靴であつた。

「こんなのは、勿論、履かないよ、だが、何だつて君は、大切さうに、(貴族だけの靴)なんぞ、アメリカまで持つて行くんだい。」

「これかい、これは君に進呈するよ。」

「貰つても、先に貰つた切れなない刃の剃刀と同じだよ。役に立ちやしないよ。落ちぶれた印度の貴族と知り合ひになつたつて事は労働者の自慢にはならないからね。」
「だけどね、ハウ。印度でも、貴族の靴が實際履くには馬鹿けて見えるつて事を、君に思ひ出させる種にはなるだらう。」

羽生は、木靴を脱いで、貴族の靴を履きにかゝつた。が、それは半吋も小さくて逆も汗をかいた足には嵌らなかつた。

「此靴は、僕の足を削らなきや履けないよ。」

「ハウ。靴にも變移があるんだね。今、日本に旅行してる——旅行してると云つた

——佛教は、印度を救はなかつたよ……」

ラム・サラツプはガンヂス河畔で、マラリヤの蚊と戦ひながら坐禪してゐたであらう、佛徒のやうな態度で、羽生には難かし過ぎて解らない、術語で、おそろしく雄辯に何か語り初めた

「ラム・サラツプ。僕には哲學的な言葉は解らないよ。印度では宗教的信念から絶食するものがあるつてね。」

「あるよ。」

「僕たちの國ではね。動物的本能に従つて、何か食ひたくても、食へない人間が澤山あるんだよ。」

「それは、どこにでもあるよ。」

「アメリカまで、探しに行かなくても君には分りはしないかい？」

「僕は戦ふのが厭なんだよ。ハウ。僕の祖先はもう十分に戦つたからね。」

「ラム・サラップ。アメリカには、鬨はねばならぬと云ふ事以外には、何も書いてはないだらうよ、君たちを踏みつけてるのは英國人だけぢやあるまいよ。僕はね、僕もほんたうに、日本がいやになつたから、さこかへ行かうと思つて船に乗つたんだよ。だけど、他人の拵へたうまい料理を、何も爲ないで食べようと云ふのは、誰も料理を拵へないと云ふのと同じだよ。でなければ、奪ふと云ふ事になるんだからね。」

羽生は、金色の靴を両方の手にブラ下げてブラ／＼動かしながら言つた。

「ハウ。僕はマルキストではないんだよ。」

「ラム・サラップ。お休み。僕は働かなげやならないんだ。明日又、お目にかゝらうよ。」

「お休み。その靴は記念品だよ。」

「お休み。」

羽生は、サロンデツキへ上つて、おもての方へ消えた。

ラム・サラップは、穴に墮ちた夜盗蟲のやうに、ゴロ／＼寝てるる同郷人越しに、

海の上一杯の果しもない、廣い、深い闇に、何かを求めるやうな眼を注いでゐた。そこにはどんな、小さな微かな光もチラついてはゐなかつた。

羽生はサロンデツキを下りながら吐き出すやうに思つた。

(どいつもこいつも、いぎたなく寝てやがる。ヘツ！ 他愛はねえや。自分の一番勝手を知つた處から逃げ出して、勝手の分らねえ處へ、出来上つたユートピアを掴みに行かうつて！ 骨も折らねえで、スツカリ貰はうなんてそんな泥坊見てえな氣持ちや、世は來ねえや)

船は、風ぎ切つた印度洋上を、悪寒でもするやうに身震ひしながら走つてゐた。

一九二六、九、二日

註 デツキバセンヂャーとは、貨物船などに、食糧携帯で、デツキの上にゴロゴロして旅行する、船客の事である。印度や支那のひどい無産者が多く、移民が主となつてゐる。貨物船では、デツキバセンヂャーに對しては、荷物と同様に心得てゐて殆んど、何等の設備もしないと云つてもいい。

マドロスと鼠

日本の船舶トン数は、歐洲大戰後引續き、英米兩國に次ぎ世界第三位を占め、その航路は世界の各方面に涉りて、到る處に日章旗が翻つてゐる。かくて日本の海運は國際的に優越なる地位を勝ち得た。

しかし第三位といふのは、單に數量の比較であつて、これを船そのものゝ素質、即ち、速力、年齢、トン數、機關、等に至つてはすこぶるそん色あるのは残念な事である。

英國の如きは、二十から二十一ノット二十隻、二十一ノット以上は三十一隻ある。米國は二十から二十一が四隻、二十一以上も四隻ある。

もしそれ、日本に至つては十二ノットから十五ノットがもつとも多く百三十五隻二十ノットから二十一ノットが僅に二隻で、それ以上は望んでも一隻もない。この點に於いては、イタリー、オランダ、フランスにも劣つてゐる。

それ許りなら我慢が出来るとしても、困るのは「古船」の多いことである。二十五年以上のいはゆる老朽船が、四百十一隻、八十四萬七千トンで、五年未滿の新造船は僅に二百二十隻に過ぎない。

地方の村落や、(有田ドラッグ)などでは近頃敬老會などと稱へて、老人の慰安會なごを組織することは誠に結構な事であるが、船に至つては二十五年以上の船齡に達したものは、到底競争場裏に立つて優者の地位を占むることは出来ぬ。

今一つはトン數である。一千トン未滿の船は、英國に五千四百五十隻、米國には八百五十二隻、日本には一千九十七隻あるから、一寸驚かさせるが、さうかといつて、一萬五千トンの大型船は、日本には一つもない。英國の如きは、一萬五千トン以上四十九隻、二萬五千トン以上八隻、イタリーで(さへ)二萬五千トンの船が二隻ある。ドイツで(さへ)「今や」二萬トン以上の遠洋大型船が四隻ある。

こんな工合で、數量だけ多くても不具者であるから、實に問題にならぬ。

これには種々理由があるが、要するに安物買ひの錢失ひで、(人命さへも大安賣りで)、三四年前から、一部船主の間に盛んに行はれた、外國の中古船輸入が大なる原因をなしてゐる。

餘り數字にのみ走るが、大正元年より今日に至るまで、船主の外國輸入船は、三百隻、十萬トンを算し、大正十一年より本年七月まで、正味五年間に輸入されたものは、百六十七隻、六十四萬トンの多數を占めてゐる。

その中、二十年以上の(老舊船)は、七十六隻、三十萬五千トン、即ち總輸入船の約四割五分に當つてゐる。

一體こんな半人足——の老朽船が、ドコからドウいふ理由で輸入されて來たのか。英國の如きは、最近二ヶ年半の間に三百二十五隻、約百十萬トンを賣却したが、その大部分は二十年以上の古船で、しかもその大部分は日本船主が買つた。のだから廢物利用も通り越して、寧ろ滑けいである。

英國では何故、そんなに中古船を賣却するのであるか、それは同國の船舶整理から出發したので、いはゆる、新式なる機關装置の經濟船に振りかへ、能率を増進して、世界海運界の覇者たらんとするのであつて、そのための廢物を譲り受けて覇者と競争しようと云ふのだから、英國から見れば日本の海運界は赤兒の手を振るやうなもので、問題にならぬ。

政府もこれには少々困つたと見え、今春、中古船の輸入關稅を引き上げたが、安いもののみ目のつく日本船主には、そんな事には頓着なく、本年一月から最近(十月二十八日)までに、三十隻、十四萬トンの輸入があつた。

この老朽船が、内地近海から、遠洋方面に「荒れ廻つて」荷物の爭奪で、同志打をやつてゐる。

將來大いに憂慮すべき事である。私に云はしむれば、かん頭一步を進めて、輸入船の禁止でも斷行せなければ、お互はますます「窮境に陥るのみである。

東〇汽船會社ロンドン支店長 安井古藏氏談 東京××新聞

ところで、同じ日、その新聞記事をかつきり読み終つた時、一通の嵩張つた手紙が、投げ込まれた。
それはかうである。

橋本君。どうだい、意外だらう？ かうして出し抜けに、僕の手紙を受け取るなんて。

何しろまる三年以上も音信不通だつたのだからね、今筆をとる段になると、實際一種の感慨に打たれざるを得ないよ。

あの震災の當時、面會を樂しんでN港に入港したのに、君は獄窓に繋留の身で可哀相に、良人故に苦勞する細君と、父の入獄を知らない無邪氣な頑是ない民雄君ミを、本船に迎へた時、

『貴下の處には避難民の婦人がお見えになりましたね。』と、船員たちが云つたが、今日はもう、第三回の震災記念日だ。

今までもG町に手紙を出したが、いつも附箋つきで戻つて來た。通信の方法には随分頭を悩ました。救助信號が打ちたかつた位だ。

『N市の警察に尋ねればよく知つてゐるには相違ないが、主義者の居所を教へては呉れまい』と思つたり、N労働組合評議會に問合はせるにも、所番地が皆目分らない。そんな譯で延び延びになつてゐた所、さうだ！ 君の隨筆『新聞』を發見したんだ。樺太碇泊中の、腐るやうな怠屈さに辛抱がし切れなくなつて、文學好きのセーラーから借りた『文藝○○』の七月號に、思はぬ人間を見附けたぢやないか。早速、君が便所の中で鼻摘みな仕事をしてゐた時分の友人、北澤君にこの『アメリカ發見』を報告に及んだ。一方『文藝○○社』に君の住所を問ひ合はせたのは云ふまでもないが、その返事の來ない中に、君に關する色々な文字が目につき出した。

中略、

かうして、ひどく骨を折つた擧句手に入れた文藝○○○、『夜の女』の頁をめくつた時、最初の一行、いや、半行も讀まないうちに「オヤツ」と叫んだものだ。長年

音信不通の者が、讀者の一人として偶然にも、出し抜けにも、自分を『モデル』にした小説を読む、この事實の方が、小説よりより以上に小説的ではないか！

そこで僕は、文學水夫に君を紹介せん事に努めた。不幸にして君から受取つた澤山の書信は、震災のため着物と共に横濱で焼けたけれど、唯一の名残を止めるものに、一九二〇年、十月七日のN新聞、A電機時計株式會社の労働爭議に關する記事があつた。それは航海術の書物の間に挟まつて、保存されてゐたのだ。で、僕はそれを見せた。その結果彼等は『痛快な男として、橋本氏の人物を十分に窺ふことが出来た。』と云つた。

「が、然し、こゝに解せぬ謎がある。」

と、彼等の一人が云ひ出した。

「それは、この新聞の記事に依れば、『夫人きし子は、長男良和(一つ)を背負ひ乍らM署へ出頭して差入物をすると共に、高等刑事監視の下に數分間、夫良規氏と對談の後、O町爭議團本部に引揚げた。』云々と云ふので、誠にこの夫にして此妻ありと

首肯せしむるも、『文藝〇〇』七月號の隨筆『新聞』に依れば、

「自分は今戀をしてゐる。三十を過ぎてから若い娘を戀すると」云々、と書いて居るのは如何にも不思議である。と云ふのだ。なるほど、これは尤も千萬だ。これだけ内助の功ある夫人、しかも二人の子供のある中で(或は其後又出来たかも知れない。君は子を作るのはうまい!)他の若い女を戀するとは、けしからん! と僕も同感だつた。

しかし、それも會つて話して見なければ、事情も分らない。第一、この曠陽館と云ふ下宿に、妻子揃つて起居してゐるかどうか、が既に疑問なのだ。それで次の横濱、又は芝浦に入港するまで、この戀愛問題に就いての、臆測は保留することに、満場一致可決した。

さあ、これからは僕の事を喋舌らして呉れ。あれから、君と別れて三年、僕もいろんな事を體驗したよ。

先づ第一に、他船と衝突した。向うの船は沈没した。船長外一名を「行方不明」たらしめた。當然溺死したには相違ないが、死體が收容出来ない場合は、「行方不明」の文字を使用することになつてゐる。

海事審判は大阪で開かれた。が裁決の結果は僕の勝になり、結局先方は、「沈められ損」の「殺され損」僕は安全地帯(無罪)の殺人犯だ！

その後毎年この日を命日として、寺に詣り讀經して貰つてゐるが、此お經の聲は海底の粘土の中の死者には聞えないで、僕にだけ聞えるのだ。

然し、殺しただけでもない。救けもした。日本海で十四日間絶食した、頻死の漂流者を發見した。それは前記衝突事件の審判の通知を、無線電信で受取つた、かつきり一時間後の出来事だつた。一つの奇蹟ではあるまいか？

しかも、殺したのが二人。助けたのが二人。で、閻魔様には帳消しだ。

これ等の出来事の後、T丸の御隠居様を降りて、中風船の今の船に乗り換へた。

此船でも、いろ／＼経験した。岩手沖で、大暴風浪の最中に、汽機空轉からシャフトが折れて、スクリュープロペラーが、海の底へおつこちて、全つきり中風の婆さん見たいに、自分では動きがとれなくなつてしまつた。

マストも折れよと吹き募る暴風、瀧のやうな雨、山のやうな怒濤、その中に足を撈ぎ去られた蟹見たいなTA丸は、運を「浪」に委せて、盆の中の小豆粒のやうにローリングした。

椅子が跳ね上つた。釘づけのテーブルが、無理に引き抜いた毛髪のやうに、板と一緒にけし飛んだ。ありつたけの抽出しは無政府状態に亂舞し初めた。鍋や釜はストーヴの上から鰻の上のやうに逃げ出して、プチ切れたり、海へ逃げ込んだ。が、それ處ではない。我々乗組員の足が、「踊り菌」でも食つたやうに、デツキにつかない。一切は「舞蹈病」に罹つた。残された生命の時間は、何分間であるか？

「今度こそは、いよ／＼年貢の收め時だ。」と僕は思つた。

これが、遠州や九十九里ヶ濱の海岸なら、助からない萬一もないではないが、屏

風の如き三陸の海岸で難破したら、その結果はどうだ！ 三井の二正丸が難破して、たつた四名の生存者を萬壽丸に拾つて、横濱に歸つた事は、君の記憶に残つてゐるだらう。あの少し南だからたまらない。

場所が場所なら、時も時だ。鼻をつまんでもわからない、眞夜中の出来事だ。無線電信は間斷なく、

S、 O、 S、

を發信した。附近にも他船はあるが、いづれも、自分自身の運行すら自由でないたとひT A丸の側迄来て呉れたとしても、手の下しやうはあるまい。

先年、國際汽船のR A丸が、大西洋上で難破した時は、英船ホメリツク號が、其「悲惨なる死に様を見届け」て呉れたさうだが、この黒ペイントのやうな暗夜では、「見届ける」ことすら出来ない。

見よ！ 暗黒の空に輝く四條の怪光を！

これT A丸が斷末魔の悲鳴をあげる、S、O、S、(救助信號)によつて、アンテナ、

ために灼熱して赤光を放つたのだ！

僕は觀念の眼を閉ぢた。

あらゆる手段は盡された。最後の試みが講じられた。

兩大錨は、ありつたけの錨鎖を延した。重量十數トンの錨、その錨鎖が、底なき貪婪の海にブラ下つて、その手を振つて宥恕を乞うた。ウインドラスの齒車は、重味に堪へかねてボロ／＼と折れた。ブレーキバンドからは發火した。

だが、こんな方法でも三十七名の生靈を救ふ事が出来れば、再び錨を巻き上げる事が出来なくてもいいのだ。

その外に、數個のシーアンカーは船首から投入された。此上はもはや、残された一つの手段もない。一切のベストは盡された。

海は飽くことのない兇暴さで荒れ狂つた。

僕は船乗りになつてから、死に直面したのはこれで三度目だから珍しくもない。海は暴れた。が僕は靜に死の豫感に襲はれた。

「翌日の朝、夜の明けるまで生きられるか知ら？」
 僕は「死ぬのには一番都合の良い人間」だ。何の未練もない。失ふべき何物も、自分の體以外には持たない。だが、十五を頭に、六人の子供を持つ船長は定めし、死にたくないであらう。その他のセーラーやフアヤマン達でも、どんなに多くの切つても切り得ない執着に囚はれてゐるであらう？ ツク／＼僕は船長の横顔を覗いて見たのであつた。

橋本君、船主は安いボロ船を買ふ。その船主は耐震耐火のビルヂングに居る。そして、我々はボロ船の腐つたサイドで、「この荒れ狂ふ怒濤と戦ふ。命の外、何物の失ふものもない僕である。その僕にしてなほ、捕へ難き、解き難き憂鬱さが胸を蝕ふ、その時、フト、僕の頭を一つの想念が掠めて過ぎた。

「俺は昨夜、ハッチの横で鼠を見たぞ！」

それはかうである。船の沈没する前には、船内の鼠は居なくなる。と云ふ傳説のあることだ。鼠は不思議に沈没を豫知する。沈没する前には必ず陸上に去る、と昔

から云ひ傳へられてゐる。

兎にかく、この時僕の氣休めになることは事實であつた。

俄然、風位は北西にかはつた。今迄南東の風浪を受けて、何物をも噛み碎く齒の形をした陸岸へと吹きつけられてゐた船は、こん度は反對に沖へ沖へと流され初めた。これで、危く二正丸の二の舞を踏まないで済んだ譯である。

一晝夜の後、軍艦が來、救助船が來、二日の後には、人事不省の船體は釜石港に曳航された。

次の出來事。

變り果てたる姿で

大榮丸横濱にかへる

甲板もイスもたきつくして

死を待つ船員が天井に遺書

発見したT丸の苦心

『横濱電話』北太平洋で遭難漂流中の第三大榮丸を発見救助した東京運輸のT丸は大榮丸をひいて四日無事横濱港外に到着したが大榮丸は見るも無慙の姿と變つてゐた同船が石炭に缺乏してからデツキの木板からイス、ベット、げんてい等いやしくも燃料となるものはみなたき盡された模様で船内は大破し運轉士室の天井には赤インクで『人間の力ではこの上出来ない。あとは天命を持つばかり』と記してあつた船内には十數通の遺書が残されてゐるが何れもジョンソン號に救はれた船長以下船員に手渡すまでは發表しないことになつた船長室に残された航海日

誌は一月十七日横濱を出帆してより、同月二十八日午後四時北太平洋漂流中まで記されてあるが、乗組員は何れも死を覺悟してゐたものである
T丸の船長N氏は語る

吾々は大榮丸搜索のため二月廿三日午後九時横濱を發し風の方向と潮流の関係から大榮丸漂流の場所を推定し三月十一日正午横濱を去る千五百海里の場所に發見するに至つたが風浪が激しいので近寄ることが出来ず並行のまゝ七日間押流され漸くひき綱を付けたが思はずしく聯絡がとれず二十一日に至り漸く完全にひき船をすることが出来たから南方航路をとり十五日目の今日横濱に無事到着した吾々の功を誇るわけではないが大榮丸の如き大船を太平洋上で搜索救助したことは未だ曾て前例のないことである、尙本船の搜索航海日數は四十一日航海マイル數は四千五百マイルに上つた

此新聞記事は、君も見たであらう。その時の悲慘なる光景を君に見せたかつた。

八月二十七日、樺太西岸、北緯、四十九度十分にて。
 手紙を受け取つた男は、ひどく打ん殴られてもしたやうに、頭の中で濃い霧が渦を巻いた。
 が、段々その霧が薄れて行くにつれて、ハッキリした陰繪が見えて來た。
 穴の開いたボロ船に、どつさり労働者が積み込まれて流れてゐた。
 肥え太つた男が、陸から望遠鏡で眺めてゐた。その男の胸の中には大きな舌が「ベロツ」と出てゐた。

—一九二六、一一、七—

ありとあらゆる木の部分は焚き盡してしまつたのだ。その上食糧の缺乏は犬を殺し、猫を屠り、鼠を狩り、猶、終に俵の藁を食べたと云ふ。殊に哀れを覺えたのは、最後まで眺めたらしい妻子と覺しき人の寫眞を、枕頭に釘附してあつた事だ。
 遮莫。決死隊として本船を離れた、三隻のボートと十九名の艇員は、何處の地點に海底の藻屑と消えし事か！

下略

何しろ愉快だ、實に愉快だ。

君は資本家の傀儡に鞍替したと云つて、憤慨したものだが、さう云はれると僕も悲觀せざるを得ないが、しかし、『夜の女』を読んだ時は追に、懐しかつた。
 兎に角く今後便りをして呉れ給へ。

大 浦 仁 平

橋 本 君。

昭和二年三月十九日印刷
昭和二年三月廿二日發行

文壇新人叢書第五編

渡 濶 船

定價金五十錢

葉 山 嘉 樹

東京市日本橋區通四丁目五番地

和 田 利 彦

東京市神田區松下町七番地

佐 藤 磨

東京市神田區松下町七番地

明治印刷株式會社

著者作檢印



著者
發行
者
印
刷
所

發行所

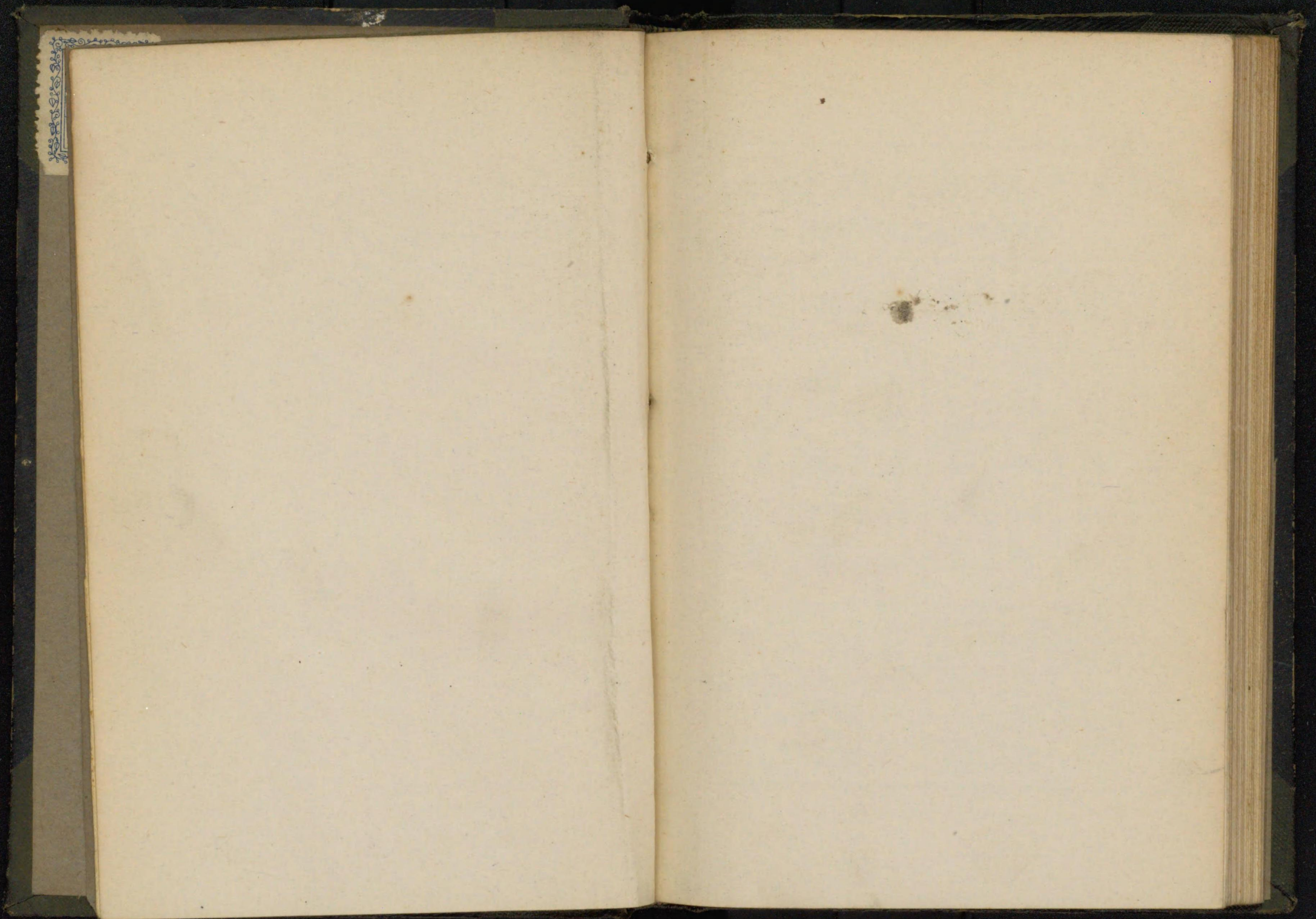
東京市日本橋區通四丁目五番地
(電話大手五)・四二一七〇
(振替口座東京)一六一七〇

春 陽 堂

■ 文壇新人叢書 ■

定價各冊五拾錢送料各四錢

<p>1 正太の馬 坪田 讓治 著</p>	<p>2 人間機械 山村 義山 著</p>	<p>3 繪のない繪本 林房 雄 著</p>	<p>4 遙なる眺望 小島 勗 著</p>	<p>5 浚 渫 船 葉山 嘉樹 著</p>	<p>6 小さい田舎者 山田 清三郎 著</p>
<p>正太の馬。正太樹をめぐ る。枝にかゝつた金輪。 コマ。子供。の憂鬱。雷雨。 田園小景。三輪車。</p>	<p>一九二二年。兵士につい て。罵られた子供。共同 ペンチ。脚。人間機械。何 が道徳的か。勇しき主婦。</p>	<p>繪のない繪本。新しいそつ ぶ物話。林檎。薔。公園 の嬋曳。馬鹿。N監獄署 懲罰日誌。</p>	<p>遙かなる眺望。 地平に現はれるもの。</p>	<p>乳色の霧。浚渫船。田舎 者が都會を見る。糲。散 歩。校正係。刺された 男。プロレタリアの乳。</p>	<p>小さい田舎者。檻。應援 辯士。足袋。歳末。木質 宿の釜。肉身をめぐつて。甘 酒の釜。</p>



550
156

50
15

550
156

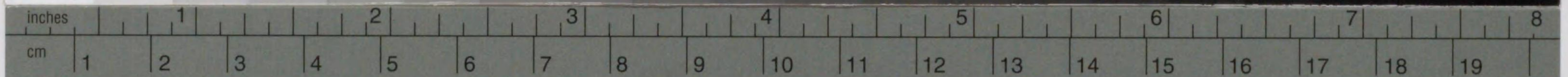


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

